匹見町埋蔵文化財調査報告書第29集

ー国道488号澄川バイパス工事に伴うー

嶽城跡発掘調査報告書

2000年３月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告書第29集

ー国道488号澄川バイパス工事に伴うー

嶽城跡発掘調査報告書

2000年３月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1．本書は，島根県益田土木建築事務所の委託を受けて，匹見町教育委員会が平成10年度に行った国道488号澄川バイパス工事に伴う，嶽城跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て，次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会	
調　査　員	匹見町教育委員会主事	山本浩之
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田美文
	〃　（臨時職員）	大賀幸恵
	〃　（　〃　）	大谷真弓
調査協力者		渡辺　聡　寺戸淳二
調査指導	島根県教育委員会文化財課	
	広島県立美術館学芸課長	村上　勇
	山口大学人文学部教授	中村友博
事　務　局	匹見町教育委員会教育長	寺戸　等
	匹見町教育委員会次長	渡辺　隆（平成11年8月31日まで）
	〃	大谷良樹（平成11年9月1日から）
	匹見町教育委員会社会教育主事	河野敏幸
発掘作業員	栗田　定　森脇雅夫　岩本　守　桐田治雄	
	村上武司　村上　強　村上　稔　平谷吾郎	
	栗田　剛　斎藤恵美子　大谷笑美子　益田愛子	

3．発掘調査に際しては，益田土木建築事務所匹見出張所の和崎技師をはじめ，島根県教育委員会文化財課に終始多大なご協力をいただくとともに，広島県立美術館の村上勇学芸課長から一方ならぬご教示を得たことに対し，ここに合わせて感謝の意を表したい。

また，発掘現場においては，地元の方々にご理解とご協力を得て，ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4．今回の調査において，柱穴状－P，土坑状－SK，竪穴住居址－SI，掘立柱建物跡－SBと略号した。なお現場あるいは編集に利用した現地地図は，匹見町土地改良区の協力を得た1／1000の縮尺のものであり，また位置図などは縮尺1／25000を使用した。なお現地における標高測量は株式会社ワールドの協力を得て行った。

編集にあたっては，山本浩之・栗田美文・大賀幸恵・大谷真弓らが携わり，執筆は第2章を渡辺友千代，他の章は山本浩之（章末に記す）が担当し，編集は山本浩之が携わった。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… （山本　浩之） …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1

第２章　地域の歴史環境 …… （渡辺友千代） …… 2
第１節　位置と立地 …… 2
第２節　地域の歴史 …… 2
第３節　調査対象地点域の概要 …… 4
１．立地 …… 4
２．形態 …… 4
３．地名 …… 5
４．史料 …… 6

第３章　調査概要 …… （山本　浩之） …… 7
第１節　はじめに …… 7
第２節　各調査区の設定概要 …… 7
第３節　層位と層序状況 …… 10
１．基本的層位と層序 …… 10
２．層位状況と文化層 …… 10
第４節　検出遺構 …… 13
１．遺構と遺物包含層 …… 13
２．遺構検出状況 …… 13

第４章　出土遺物 …… （山本　浩之） …… 22
第１節　はじめに …… 22
第２節　実測遺物 …… 22
１．縄文遺物類 …… 22
２．中世・近世遺物類 …… 24

挿図・図表目次

第１図　位置図 …… 1
第２図　位置と周辺の遺跡分布図 …… 3
第３図　北西－南東方向にみた地形断面図 …… 4
第４図　遺跡周辺の切図 …… 5
第５図　調査区配置図 …… 8
第６図　土層図（1） …… 9
第７図　土層図（2） ……11
第８図　遺構断面図（1） ……12
第９図　遺構断面図（2） ……13
第10図　遺構断面図（3） ……16
第11図　遺構断面図（4） ……17
第12図　遺構断面図（5） ……17
第13図　遺構断面図（6） ……17
第14図　遺構指示図（1） ……18
第15図　遺構指示図（2） ……19
第16図　遺構指示図（3） ……20
第17図　石器・剥片類実測図……23
第18図　陶磁器類実測図（1） ……25
第19図　陶磁器類実測図（2） ……27
第20図　陶磁器類実測図（3） ……29
第21図　土師質・瓦質・鉄器類実測図 ……31

第１表　遺構計測表（1） ……14
　　遺構計測表（2） ……15
第２表　出土遺物集計表……22

図　版　目　次

図版１　調査地点鳥瞰

図版２　１．北からみた遺跡の近景
２．上空から望む遺跡の地形的景観
３．A－２・A－４調査区の北壁（南から）
４．A－１・A－３調査区の北壁（南から）
５．A－５調査区の北壁（南から）
６．A－６調査区の北壁（南から）
７．B－１調査区の南壁（北西から）
８．B－２調査区の南壁（北東から）

図版３　１．B－３調査区の南壁（北から）
２．B－４調査区の南壁（北から）
３．D調査区の東壁（北西から）
４．D調査区南端の積石状況
５．焼土塊の出土状況（P55）
６．土錘の出土状況（SK28）
７．陶磁器の出土状況（SK26－2）
８．SK17の遺構表出状況（南から）

図版４　１．SB01北半部の遺構表出状況（南から）
２．SK01・SK02の遺構表出状況（南から）
３．SK38の遺構表出状況（南から）
４．SK43の遺構表出状況（北から）
５．SB01南半部の遺構表出状況（南から）
６．SK26の遺構表出状況（南から）
７．P42の遺構表出状況（東から）
８．SI01の遺構表出状況（南から）

図版５　１．SK56の遺構表出状況（南から）
２．P121・P122・P123の遺構表出状況（北から）
３．SK64の遺構表出状況（南から）
４．SK74の遺構表出状況（南西から）
５．SK20の遺構検出状況（南から）
６．SB01北半部の遺構検出状況（南から）
７．SB01－P01の半截状況（南から）
８．SB01の遺構検出状況（東から）

図版６　１．SB01の遺構検出部分拡大（北東から）
２．SB01の西壁状況（東から）
３．SK26の完掘状況（南から）
４．SK56の完掘状況（南から）
５．SK64の半截状況（南から）
６．SK64の半截部分拡大（南から）
７．SK64の完掘状況（南から）
８．SK64の底部拡大（南から）

図版７　１．SK74の半截状況（南東から）
２．SK75の半截状況（南から）
３．SK74の底部から検出された骨片
４．D調査区の完掘状況（南から）
５．B－１調査区の南側の傾斜地にみられる積石
６．遺構半截の作業風景
７．SK64の実測風景
８．本調査地点の航空写真撮影風景

図版８　１．石器・剥片・陶磁器類（1）
２．陶磁器類（2）
３．陶磁器類（3）
４．土師質・瓦質・鉄器類

第１章　調査に至る経緯と経過

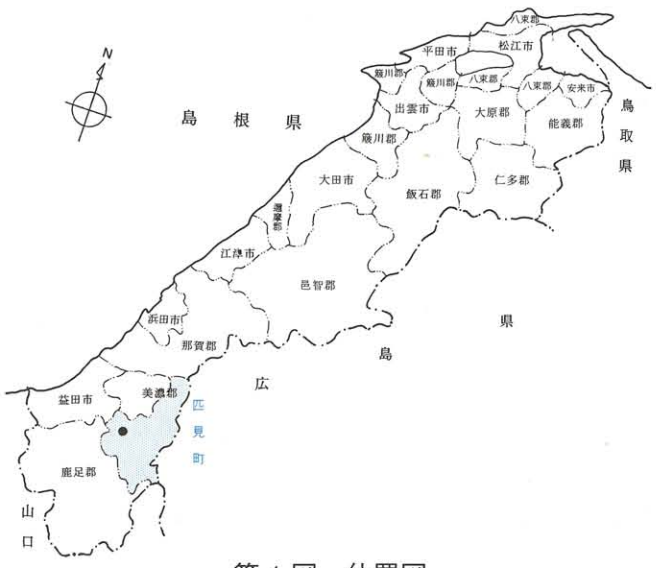
第１節　調査に至る経緯

島根県益田土木建築事務所匹見出張所から，口頭による国道488号線改築（改良）工事に伴う計画案が打診されたのは平成８年５月のことであった。その計画案の一部には周知の遺跡が存在していることから，平成８年８月21日付けの島教文財第６号の18により，同地点に係る周知の遺跡部分の保護を重点とした調査の実施が，匹見町教育委員会に正式に通達されたのであった。

この旨を受けて，その後事業者側である島根県益田土木建築事務所匹見出張所と調査主体である当匹見町教育委員会と，そして県教育委員会との三者で協議を重ねていった結果，平成10年４月15日からの分布調査の実施が決定したのである。数箇所のトレンチ設定によるその調査から，該当期の遺物・遺構は伴うものの，その一方で大部分において後世におけるところの比度の高い削平が行われていたことが判明したのであった。しかしながらも部分的調査ゆえにその全貌は把握できず，したがって調査面積を拡大するなどの本格的調査の必要性が生じてきた結果，一応現地調査を同年５月末で一旦打ち切りという形で終了し，即時本格調査へと移っていったのである。

第２節　調査の経過

本格調査の実施にあたり，平成10年６月２日付けで文化庁宛に発掘調査の報告を提出するとともに，現地調査は同６月３日からの開始となったのである。その調査結果としては，後世調査対象地は数次の削平を受けており，そのため部分的に攪乱の影響を受けていた状況下で，多量の陶磁器類の出土や柱穴・土坑などの遺構も検出されたことから，一時期にとどまらない複合的な遺跡の存在を確認できるに至ったのである。分布発掘調査時には，松江南高等学校の山根正明先生が調査指導に来跡されて，ご教示をいただくとともに，また同年12月３・４日には山口大学人文学部の中村友博教授が，そして同年12月７・８日には広島県立美術館の村上勇学芸課長が来匹され，遺物の分類および位置付けなどを賜った。



第１図　位置図

なおその調査自体は，遺物や遺構の想定以上の多出などにより調査予定終了日には間に合わず，したがって同年９月10日付けの委託変更契約書の処置を踏まえながら同年10月26日をもって無事終了したもので，その間の稼働日数82日間を費やして実施したのであった。

（山本　浩之）

第２章　地域の歴史環境

第１節　位置と立地

嶽城跡が所在する澄川は，匹見町内における７つの大字単位からなるうちの，その１地区に当たる（第１図）。

本地区は町域の北西部に位置し，標高は河岸段丘の可耕地で140～180m，そして大部分は500～700m台の山地で占められているという立地にある。また地区を貫流する匹見川は，小さな蛇行を繰り返しながら，中流の長尾原で能登川，下流の大津で北流した石谷川の支流を集め，凡そ北東方向に流下して高津川に合流している。平地を成した可耕地といえば，その匹見川が形成した持三郎・三出原・長尾原・土井原の地内に僅かな段丘地をみるにすぎないのである（第２図）。

このうち三出原地内は，明治22年に広瀬・石谷などの大字単位を含めて匹見下村として成立した当時，役場などの諸官庁が置かれ，北西部域の中心的役割を果たした場所でもあった。それは匹見上村・道川村との３ケ村の合併によって，匹見村となった昭和30年（同31年には町制が施行され，匹見町となる）までつづき，現在ではそれらの支所，公民館，診療所などがあって，その余脈が未だみられる。

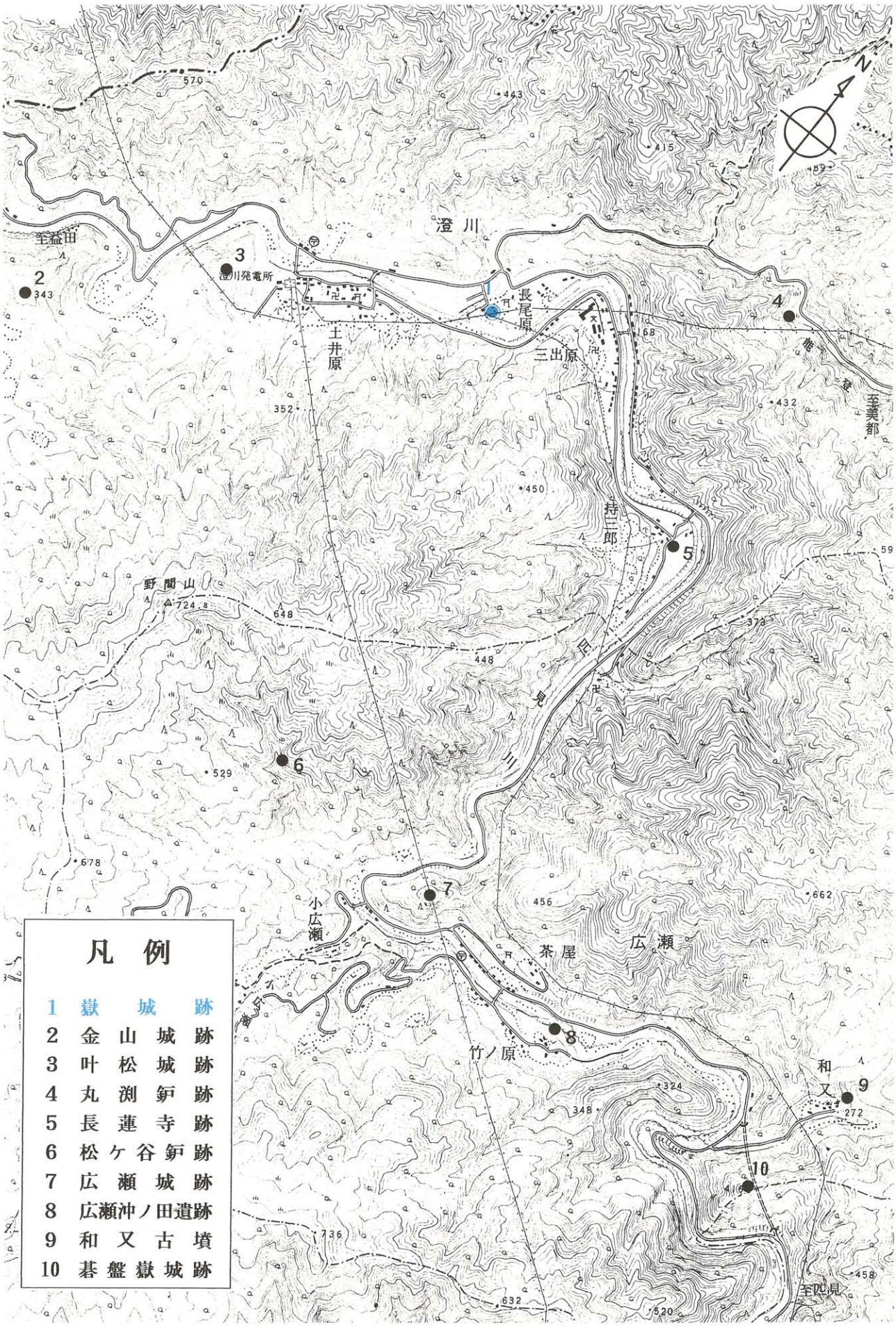
第２節　地域の歴史

また近世の藩制期には匹見地域は，16ケ村が匹見組に属して浜田藩の支配を受けていた。その現地機関であった代官所は，初めには匹見上に置かれていたが，正徳年間（1711～1715）には益田代官所の附設として本地の三出原に澄川出張所が設けられていたのであった。

該当期における産業は，山間地という生産地力が弱かったためか，とくに山地を利用して三椏や楮が植培され，石見半紙の生産を高めていたようである。ちなみに安政２年（1855）では，澄川村の戸数161軒のうち，紙船は91軒に及び，匹見組中で西村につづき，東村とともに第２位の盛況を極めていた。

さて中世以前は，どうであったのであろうか。本地区における発掘調査の事例が少なく，周知の遺跡も数箇所程度に止まるといった状況のため，また史料も断片的で把握しきれないが，本地区は平安末期までは国衛（別府）領であったものの，その機能が弱体的化していく中で，実質的には御神本（後の益田）氏の私的所有地化していったものと考えられる。これは国司を離れた以降も，その国権的地位を利用しつつ勢力の拡大を謀ったものであり，鎌倉初期には源氏方として匹見地域の平氏方を一掃して，その所領を確たるものにしていたようである。それは源氏に討ち亡ぼされたという数々の平家伝説も補っているが，地内では金山城（第２図）に拠ったといわれる中納言平教盛の同族，平盛幸は最たる者であったのである。

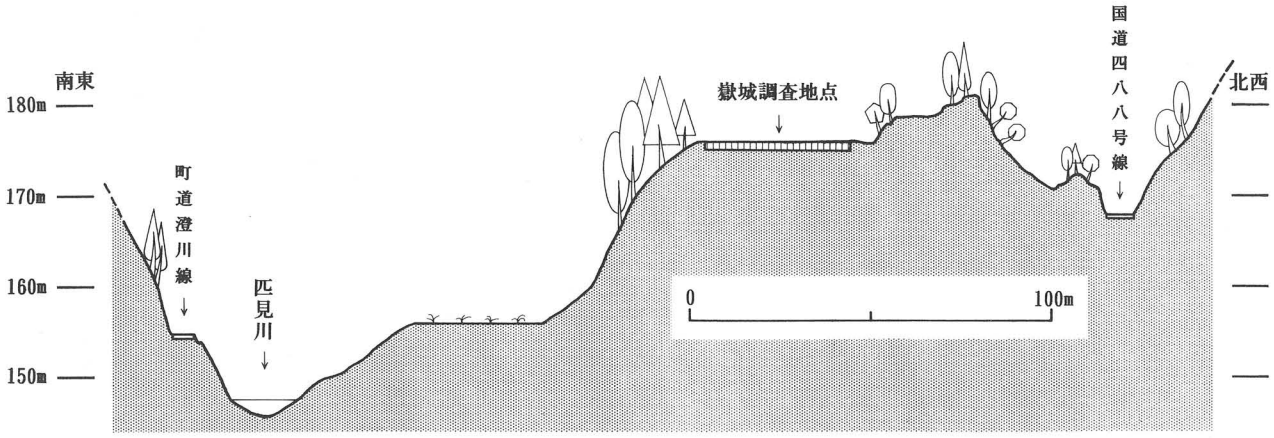
そして南北朝（永和２年）のものであるが，益田氏の基本台帳である『益田本郷御年貢并田数目録帳』『益田本郷田数注文』によると，本地区は奥十二畠として区分され，すみかハ（澄川）名・物三



第２図　位置と周辺の遺跡分布図

郎（持三郎）名・なかわら名・やまさき（山崎）名・さなてはら（三出原）名などの具体的な名田がみえ，完全に益田氏の領有地であったことがわかる。そしてこれらの管理は，おそらく匹見一円で繁流した斎藤氏の庶流と捉えられる澄川氏であったのではないかと思われるのである。そのことは金山城藤原系澄川氏系図によって想像され，また前掲の田数帳には長尾原の名主として「次郎大夫」がみられるが，それは本系図によるところの澄川盛弘らしいことが窺われるからである。その澄川氏は室町初期には，益田氏との親縁関係にあった寺戸氏に追われて津茂郷の金谷に移り，また後には盛永の裔（叶松城？）は吉賀郷の有飯に移拠したといわれている。

本地における寺戸氏は益田藤兼時代，２百貫の知行をもって叶松城に居拠したことに始まるといわれ，資清そして通延の２代にわたり居城したが。関ケ原戦の後は毛利の家臣として長州須佐に移り，戦乱の時代はここに終わったのであった。



第３図　北西一南東方向にみた地形断面図

第３節　調査対象地点域の概要

１．立　地

調査対象地は，南側100mに西流する匹見川，西側を南流する能登川とに挟まれた標高約174～183mを測る舌状の突端に立地する（第５図・図版１）。比高は約25mを測り，北側の一部は尾根筋伝えに連なっているものの，大部分においては円状を呈して独立的丘陵地を形成している（第３図・図版2－2）。

本調査地点は，城跡であったという確たる史料は今のところない。ただし廣田八穂氏の『西石見の豪族と山城』の叶松城の項に，口伝らしき記述で城跡として捉えられている。また石見地方の山城研究家の岩崎健氏も，本地点を縄張り形態から断定しておられ，筆者も後述する状況資料から肯定しておきたいと思う。

２．形　態

まず立地的にみて，地取り形態は丘城型といえるものであろう。舌状尾根部の突端部の自然丘陵を利用し，開けた南部側から，４段からなる削平をもって連郭式縄張りを形成している（昭和の初め小学校造成時に削平されたため，今では２段めは顕著ではない）。北面の尾根側は，２条（うち１つは

道路施工のため掘削されたものと想定する）からなる堀切りをもって遮断していた様子が窺われ，城郭形態の体裁を整えているといえるだろう。一方，本地点は尾根伝い，また能登川伝えに津茂郷（美都町）に通じる立地にあるとともに，そして東－西方向には本流の匹見川が流れ，つまり３方に開けるといった要所から，そこには城館的機能をもたせるためには最好地を整えているものということができよう。

3. 地　名

さて，本地点を切図による地名から探ってみると，まずその可能性が高いと想定できるものに「後木戸」という地名を指摘できる（第４図）。その地名には，後切戸という漢字が当てられたものが３筆みられるが，他の７筆は後木戸として地割されており，地点の南側面に半周状に捉えられるのであ

第４図　遺跡周辺の切図

る。おそらく立地上からみても，これは城館に関わる城戸に当たるもので，これに後という文語を冠せてることから裏城戸ということを意味したものであろうと考えられる。よって大手側は逆方向の，つまり尾根筋の南側に設けられていたのではないかと解される。それは恐らくタキハザと名付く位置辺りではなかったかと思われるとともに，その逆くの首根に当たる位置にみられる「フロノ段」あるいは「風呂ノ段」という３筆の地名は合わせて注意すべきものと考えられる。

本地名は袋状を呈したという地形から名付けられたものかもしれないが，直訳して風呂があった場所とも考えられる。ただし神森をブロといわれる語源もあるといわれていることから，そこは神を祀った所だった可能性も想定できる。いずれにしても「～段」という語句が附加されているということは，その場所が人為的よったものであったことにほかならないと思われる。また，北東側の本丘陵の下には「佛ノ原」という地名がみられるが，これは本地点から艮（うしとら）の方向に当たっているため，鬼門を忌みきらい，その封じのために草庵らしきものが置かれていたのではないだろうか。

なお，南側の後木戸の傾斜地には，一部石垣状のものがみられた（図版7－5）が，石体の大きさに統一性がないことから該当期のものとは判断しがたく，あるいは「石落し」に使用するための石群だったのではないかとみている。またその丘陵下にみえる「山崎」の地名は，南北朝期に成るといわれる『益田本郷田数注文』に記されている名田に宛るものと捉えられるものである（第４図）。

4．史　料

本地点が城跡であったとする確固たる史料はないが，ただし『石見諸家系図録』（註１）による寺戸家系図には，越智姓河野氏流として，８代資能の次男資長が居拠していたことが確認できる。この資長は「父死後澄川村嶽に分家，土居初代」とあり，その居拠が戦国末から近世初めだったとはいえ，本地点が未だその機能を果たした時期と絡んでいたからこそ，分流したのではないかと考える。そして前述しているとおり，その寺戸氏の本城は１キロ下流の叶松城であったことからみて，向城としての，また小規模という形態からその支城であったと想定でき，寺戸氏入城とともに築かれていたのではないかと思われる。さらに本地区は寺戸氏が入拠する以前，澄川氏が土着していたことが窺われることから，彼らも立地的にも気にしていた丘陵地であったに違いないと想定しているのである。

（渡辺　友千代）

〔註1〕岡本正司　著　昭和43年11月３日　島根県郷土史会発行

第3章　調　査　概　要

第１節　はじめに

調査の対象とした嶽（だけ）と呼称される本遺跡は，島根県美濃郡匹見町大字澄川イ817番地ほかに所在しており，近接する叶松城の支城と捉らえられる周知の遺跡である（第２図・図版１）。

本遺跡は，当澄川地区を貫北西流する匹見川右岸（長尾原）の河岸段丘にあって，そこは南側約50m地点に北西流し，その一方で西側至近を南下流して匹見川へと相会するという２川に挟まれた場所に位置する（第３図・図版2－2)。またそこは北西側の山地が南方向へと突き出して舌状を成す尾根の先端部にあたり，その山上は平坦に削平された比度の小さい３段から形成され，畑地として利用されている場所である。

平成10年度に本格調査に先がけて行われた分布調査においては，事業の計画予定地内のなかの平坦な削平地に範囲をしぼり，東西方向を主軸線として設定した串状測量区上に，任意に約10箇所の調査トレンチを配置して調査を実施したものである。

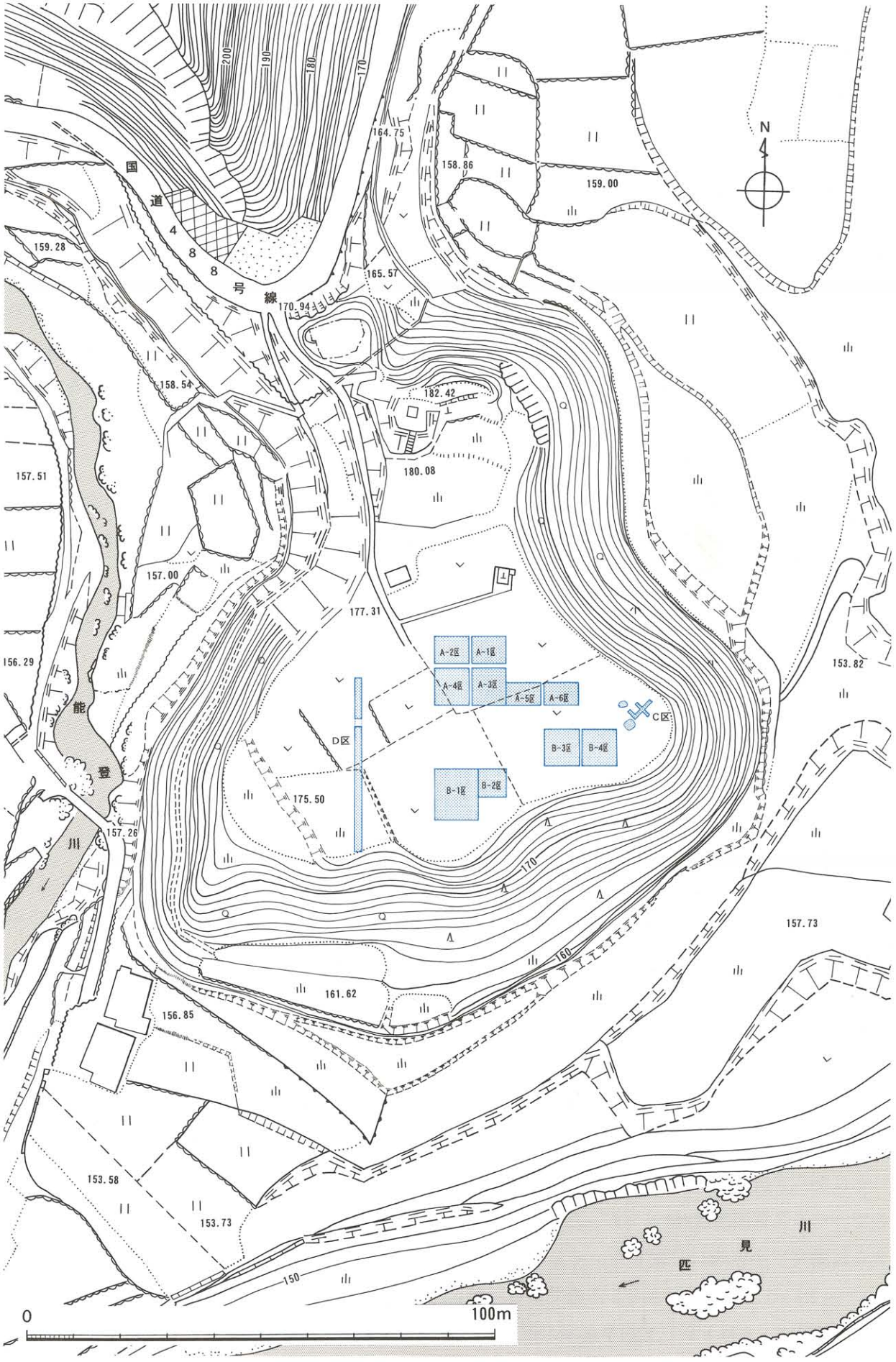
その分布調査からは，層序及び遺物・遺構などの分布状況がある程度把握されていたことから，本格調査においては場所・面積共ども任意に設定し，必要に応じては拡張区を設けたもので，その主軸線の北半域に設定したものをA調査区，南半域をB調査区，東端部設定トレンチ（分布調査時）の拡張区域をC調査区，そして西半域に南北方向に設定したものをD調査区と大別して設定したのである。また掘削は平面発掘とし，遺物は区画別の層序ごとに一括して採り上げることを基本にしたものの，中には小型掘削機での試掘を行ったものもある。

第２節　各調査区の設定概要

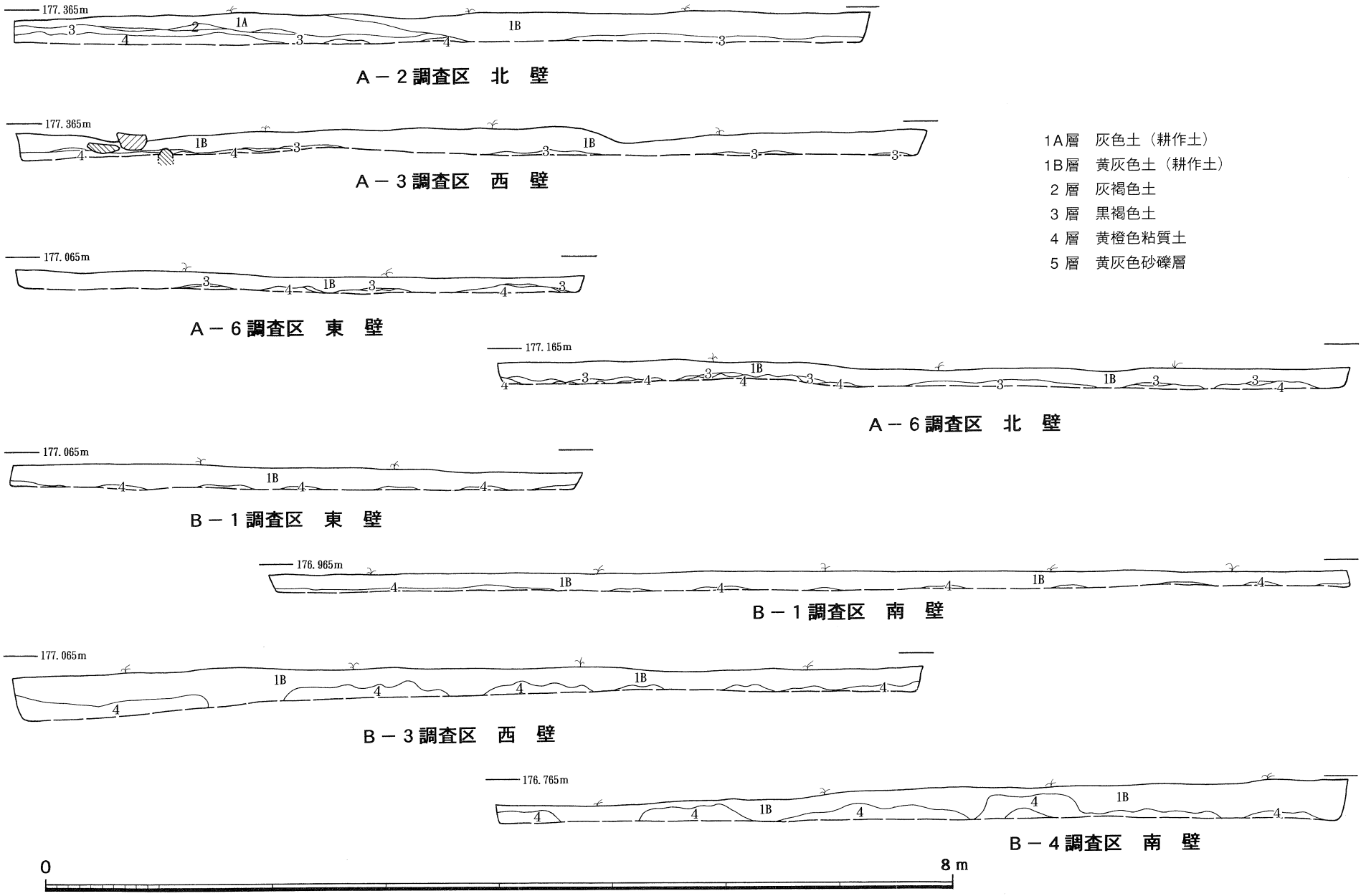
前述した串状形測量区は，東－西方向に約80mの長さをもって直走する主軸トレンチを中心としながら，それに直交する３条の直線トレンチで構成されており，それぞれ東側から南北トレンチ１，２，３というように分布調査時には称名したものであって，いずれも幅1.5mを測るものであった。

これをベースとして本格調査へと拡張していったなかで，まずA調査区を設定した畑地は，主軸トレンチの北半部域とし，そこは現地表面標高約177.3mを測る場所である。そのうち調査区は南北トレンチ１・２の北端部に分布調査時，遺物・遺構を検出できたことから，その広がりを確認するために各北端点を直結したものを基辺として，南方向（主軸トレンチ方向）へ15mほど平行移動し，さらにそこから５mの幅をもって主軸トレンチと平行に東方向15mほど突出させた形状区を範囲としたもので，その発掘面積は288㎡であった。また，その調査区内には北－南・東－西方向にベルトを設け，さらに適時に小区画に分割した。そして，これら小区画したものは，番号を用いて順にA－1・A－2・・・というように地区名としたのである（第５図・図版2－3・2－4・2－5・2－6)。

B調査区は，主軸トレンチ南半部域の現地表面標高約176.2mを測る畑地に設定したもので，その南側の斜面地には積石と思われる河床礫が点散している（図版7－5)。A調査区と同様の理由から，ま


国道488号線
能登川
見匹川
N
A-2区
A-1区
A-4区
A-3区
A-5区
A-6区
B-3区
B-4区
B-1区
B-2区
C区
D区
200
190
180
170
164.75
158.86
159.00
159.28
165.57
170.94
158.54
182.42
180.08
157.51
157.00
177.31
156.29
153.82
175.50
157.26
157.73
161.62
156.85
153.58
153.73
150
0
100m

第５図　調査区配置図



1A層　灰色土（耕作土）
1B層　黄灰色土（耕作土）
2 層　灰褐色土
3 層　黒褐色土
4 層　黄橙色粘質土
5 層　黄灰色砂礫層

第6図　土層図（1）

ず南北トレンチ1・2の南端部間，つまり主軸トレンチから南方向へ9mほど移動した地点域に104.5㎡と36㎡の方形区を隣接して2区設定し，そして主軸トレンチ東半部沿いの，ほぼ中央域にベルトによって小区画化した60㎡を2区設定した。したがって，順にB−1・B−2・・・というように称名して，A調査区間と相互して対比できるよう配慮したもので，その発掘総面積は264.25㎡であった（第5図・図版2−7・2−8・3−1・3−2)。

C調査区と称したものは，現地表面標高約176.0mを測る姫竹群生地に設定した区名で，そこは主軸トレンチ東端部域に該当して，周辺に石積みと思われる河床礫が点在している場所である。これは分布調査時における部分的拡張区，および至近に検出された集石群を総称したものであり，このうち拡張区の面積は5.8㎡を測るものである（第5図・図版5−4)。

D調査区と称したものは，地形的層位を確認するために小型掘削機で掘り進めたもので，その区域は南北トレンチ3上に該当し，その掘削面積は44.6m×1.5mの66.9㎡に及んだものである（第5図・図版7−4)。

第3節　層位と層序状況

1．基本的層位と層序

本遺跡における層序は，1層の耕作土，2層の灰褐色土，3層の黒褐色土，4層の黄橙色粘質土，5層の黄灰色砂礫層の順で下部へと堆積していた（第6図・第7図・図版3−3)。

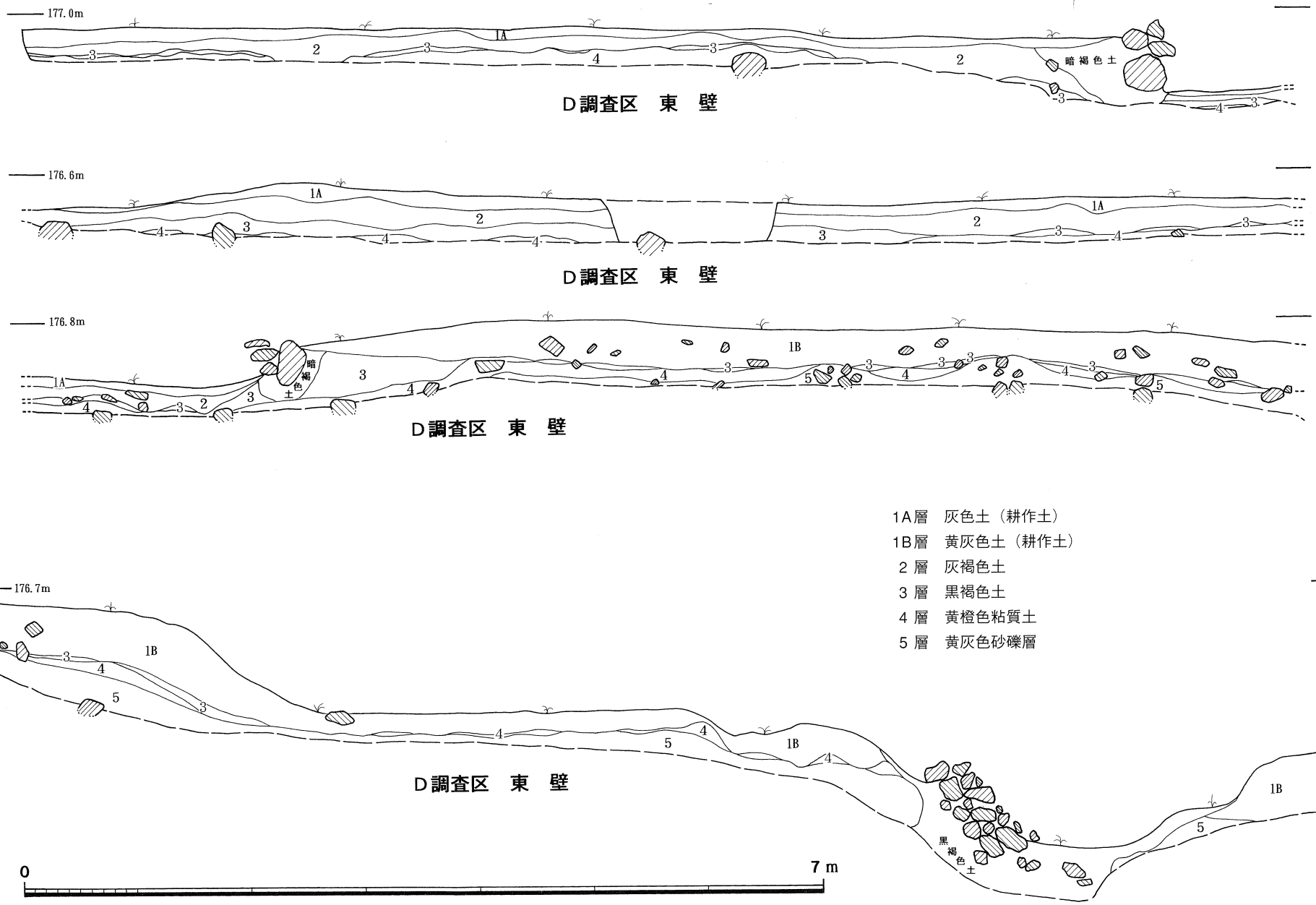
基本的には上述のように堆積していたと想定されるが，各地区によっては差異がみられた。これは本地点域において，山城の築城時期および旧澄川小学校（昭和9年に廃校）の跡地であったと伝えられることから，その建設時期など，少なくても2回もしくは3回の大がかりな整備による削平が行われたことがその主因と考えられる。とくに当調査区域の中央部にあたるA・B調査区間域はその度合いが著しく，現地形に堆積していたと想定される2層の灰褐色土においては，そのほとんどが除去された状況が把握されたのである。また東域においては，2層および3層の黒褐色土が同様に除去された状況も把握できた反面，北から西域にかけては2層および3層は基本的層序に従って堆積していたことが看守できたのである。

このことから地形的に僅少な高低差はあるものの，現地形においては北から西域にかけて削平の度合は少なかったと想定できるのである。

したがって，部分的に3層まで削平が行われたことによるその掘削土は，少なからず北から西域にかけての区域に押し出された状況を呈するとも想像され，なかでも1層の耕作土はその色調の相違から1A層・1B層と2つに細分したことを付加しておきたいのである。

2．層位状況と文化層（遺物・遺構包含層）

本遺跡での表土である1層耕作土は，凡そ5〜40㎝を測る層位であり，その色調の違いから1A・1B層とに細分したのは前述のとおりである。灰色を呈した1A層は2層にあたる灰褐色に，黄灰色を呈した1B層は4層にあたる黄橙色にそれぞれ類似していたもので，後者においてはやや粘質性を帯びていた。その堆積状況は，1A層においてはおもに北西域に5〜20㎝を測って薄く，また1B層においてはA・B調査区間の中央部が10〜30㎝を測って薄く，逆に南西部および南東部においては



1A層　灰色土（耕作土）
1B層　黄灰色土（耕作土）
2層　灰褐色土
3層　黒褐色土
4層　黄橙色粘質土
5層　黄灰色砂礫層

第7図　土層図（2）

20～40cmを測って比較的厚く堆積していた。これは整地時の削平等による影響および現地形を呈したと想定される斜度に関係したものなどに起因したと考えられる。したがって本層はかなり撹乱されており，その出土状況はA・B調査区を中心に近世期以降の陶磁器類が大部分を占めており，なかには搬入したと思われる縄文遺物や中世期の陶磁器類なども混在していた。

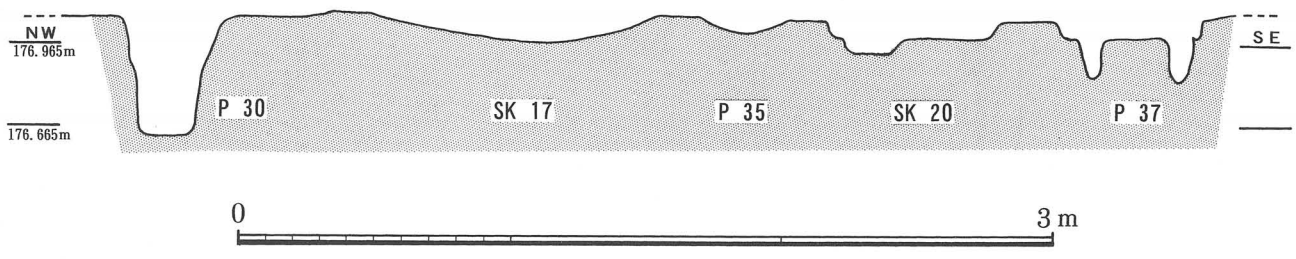
2層は灰褐色土である。本層は，とくに北西から南西部へ派生した地点域には堆積が認められたもので，その外域においては部分的に本層の消去あるいは尖滅などの堆積状況が窺われて，なかでも本調査域の中央から東域にかけてはその状況は著しいものであった。したがって，これも削平等の影響および原地形を呈したと想定される斜度に関係したものなどに起因したと考えられる。

なお本層は，削平等に影響された撹乱的要素に起因して，異なる時期の出土遺物が認められることや，山城築城期と想定される遺構などの遺存性が極めて低かったことなどから1・2層出土物として一括した採りあげを行ったことを報告しておきたい。ただし，これらを加味しても，依然中・近世以降の陶磁器類が多数出土したことは事実であることから，断定はできないものの中世期から近世期にかけての文化層である可能性が高いと思われる。

3層の黒褐色土は中央から西域一帯にかけて堆積しており，層厚は約5～30cmを測って比較的薄く，また部分的に尖滅を繰り返している状況が認められた。そして東から南東域に進むにしたがって，消滅していく状況も窺われたのである。これは，とくに東から南東域にみられる1B層の下層として4層が認められる（第6図）ことからも判断できるもので，明らかに人的な行為が加えられており，おそらく原地形にある程度沿って堆積していた本層において，その比度の高い削平は本深度にまで達していたのであろう。また本層における出土遺物は不明瞭であるものの，1・2層において縄文期の遺物も少なからず含まれていたことからもその時代の文化層として捉えている。

4層は黄褐色粘質土で，なかには10～15cm程度の円・角礫もわずかに含まれていた。これは北側に尾根筋をもつことから，その氾濫土石物として捉えられ，また本調査域を周流する河川からみて，当地点域を流下していた可能性をも窺えるのである。なお遺構からの共伴遺物を除いて本層からは出土遺物はなく，実質的には地山と捉えられる層位と判断したため発掘調査は本深度域で止めている地点もある。

以下，5層と捉えられた黄灰色砂礫層は，10～15cm大の円礫を含む本域の基盤層である。



第8図　遺構断面図（1）

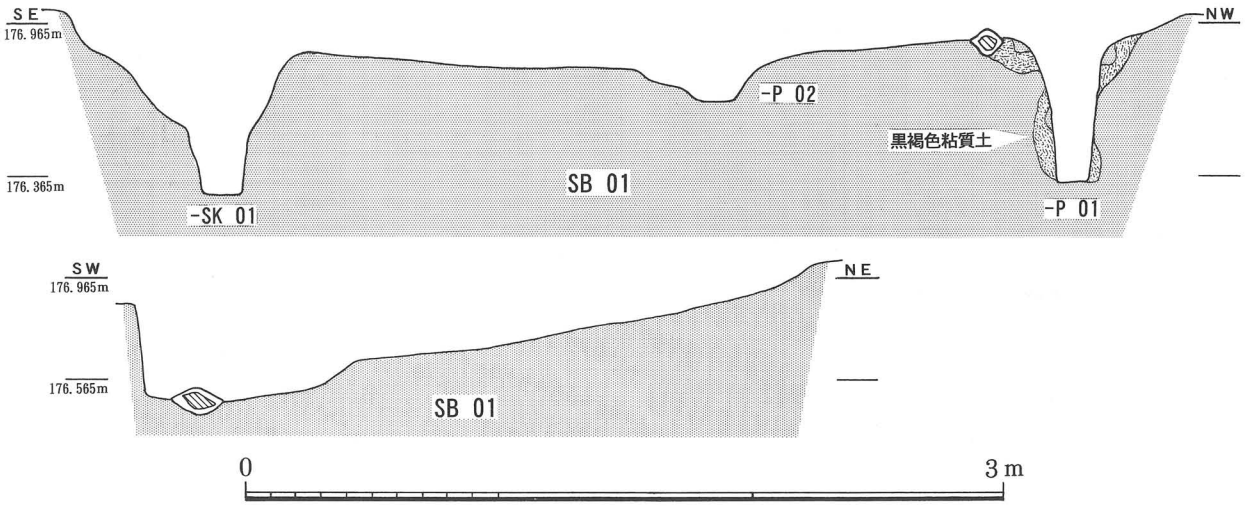
第４節　検出遺構

1．遺構と遺物包含層

本遺跡の遺物包含層は，前項で想定しているように大きく別けて３期のものに捉えている。その１つは１層で陶磁器・鉄器類を中心とした近世から現代までのもの，陶磁器類および瓦質・土師質土器などを包含する２層を中心とした中世のもの，そして黒耀石や安山岩などの剥片を中心とする縄文期のものであった（第１表）。しかしながら本遺跡において数次の削平が行われたことは既述のとおりで攪乱の度合いも強かったことから，層位の特定も難しく，また遺構内の共伴遺物を除いて，出土遺物の層位的位置付けも行い難い状況であった。そのようななかで出土遺物の類別・数量的状況や，遺構面の検出状況などを参照して，遺物包含層の時代特定に反映させたのであった。

その検出遺構においても，当然削平の影響を強く受けていることから，その構築年代の特定は難しく，数次による時代性が入って具体性に欠けていたり，また遺構の重なりも多く事実を捉えることの出来ない状況であった。そのなかにあって実際の在り方から，つまり個々の遺構面を事実そのままに捉えていくことのみにとどめたのである。

なお出来る限り特徴的なものを撰定するとともに，本稿では遺構について，その機能・形状から掘立柱建物跡とするものをSB，竪穴住居址とするものをSI，そして柱穴状のものをP，土坑状のものをSKとして略号することにした。



第９図　遺構断面図（2）

2．遺構検出状況

A調査区（第14図・第１表）当調査区では，SBと略号した掘立柱建物跡１棟，SIとした竪穴住居址１棟，Pとした柱穴状のもの111穴，SKとした土坑状のもの56基が検出されて，全調査区中もっとも多数を占めたのである。そのほとんどは４層の黄橙色粘質土とその上位層との層界面に検出されたものであるが，前述のように数次における削平のため，また建て替え等の遺構の重なり等も多いことから，その構築年代の特定は非常に難しい状況であった。

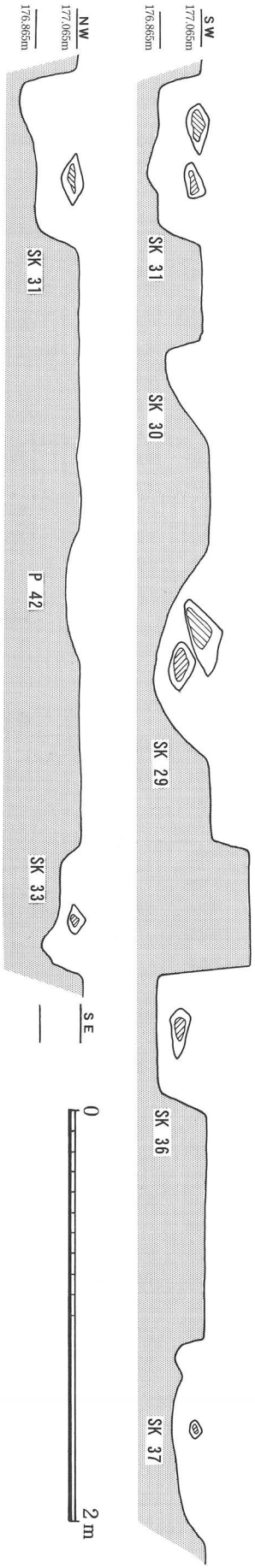
第１表　遺構計測表（1）

遺　構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	表出面標高 m	炭化物	焼土	摘　　要	遺　構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	表出面標高 m	炭化物	焼土	摘　　要
P01	20.0	22.0	26.0	177.045				P55	37.0	68.0	9.0	177.055		少量	陶磁器１点・瓦１点
P02	14.0		10.0	177.105				P56	28.0	41.0	18.0	177.045			
P03	14.0	22.0	15.0	177.105				P57	42.0	60.0	33.0	177.055	少量	少量	
P04	24.0	26.0	21.0	177.055				P58	31.0	44.0	18.0	177.055	少量	少量	陶磁器１点
P05	40.0	48.0	9.0	177.085				P59	34.0	43.0	34.0	177.045	少量	少量	
P06－1	－	－	14.0	177.095				P60	29.0	34.0	22.0	177.075		少量	
－2	22.0	24.0	10.0	177.105				P61－1	－	－	22.0	177.065	少量	少量	
P07	30.0	34.0	25.0	177.095				P61－2	26.0	26.0	22.0	177.055	少量	少量	
P08	20.0	26.0	11.0	177.085			中国製陶磁器１点	P62	16.0	18.0	14.0	177.055	少量	少量	
P09	24.0	28.0	6.0	177.085				P63	23.0	28.0	4.0	177.085	少量	少量	
P10	36.0	36.0	27.0	177.085				P64	49.0	57.0	29.0	177.085			
P11	16.0	50.0	7.0	177.105				P65	16.0	20.0	13.0	177.055			
P12	22.0	46.0	12.0	177.085				P66	29.0	42.0	36.0	177.035	少量	少量	瓦質器９点・瓦１点・鉄滓１点
P13	60.0	－	20.0	177.075				P67	42.0	72.0	24.0	177.035	少量	少量	
P14	22.0	38.0	17.0	177.095	微少	微少		P68	20.0	21.0	4.0	177.045			
P15	33.0	34.0	6.0	177.125				P69	46.0	62.0	15.0	177.005		少量	
P16	30.0	32.0	6.0	177.115				P70	26.0	32.0	7.0	176.995	少量	少量	
P17	39.0	54.0	21.0	177.105				P71	38.0	40.0	18.0	176.995	少量	少量	
P18	22.0	－	22.0	177.105				P72	26.0	64.0	10.0	176.985	少量	少量	
P19	38.0	－	42.0	177.075	多量	多量		P73	44.0	49.0	38.0	176.985	少量	少量	石器剥片１点
P20	30.0	32.0	8.0	177.045				P74－1	39.0	104.0	22.0	176.965	少量	少量	
P21	22.0	24.0	9.0	177.075				－2	50.0	96.0	25.0	176.935			瓦１点
P22	16.0	－	8.0	177.075				P75	18.0	22.0	16.0	177.015			
P23	16.0	32.0	11.0	177.065	少量			P76	26.0	27.0	9.0	176.985			
P24	32.0	36.0	16.0	177.055			中国製陶磁器１点	P77	26.0	38.0	23.0	176.985			
P25	28.0	30.0	6.0	177.075			黒耀石１点・瓦質器１点	P78	16.0	－	17.0	176.965			
P26－1	26.0	38.0	8.0	177.085				P79	11.0	12.0	5.0	176.955			
－2	24.0	30.0	9.0	177.085				P80	21.0	－	－	176.935			
P27	21.0	24.0	9.0	177.045				P81	31.0	36.0	10.0	176.915			
P28	26.0	30.0	14.0	177.075			土師質土器１点	P82	－	－	15.0	176.915			
P29	34.0	44.0	12.0	177.065				P83	26.0	28.0	25.0	176.915			陶磁器１点・鉄滓１点
P30	34.0	40.0	43.0	177.065			陶磁器１点	P84	31.0	42.0	9.0	176.935			
P31	30.0	43.0	14.0	177.065	少量	少量		P85	30.0	37.0	9.0	176.915			
P32	18.0	30.0	3.0	177.055	少量	少量		P86	32.0	34.0	13.0	176.915			
P33	38.0	43.0	20.0	177.065			陶磁器２点	P87	32.0	34.0	7.0	176.915			
P34	38.0	40.0	19.0	177.065	少量	少量		P88	18.0	20.0	7.0	176.905			
P35	24.0	30.0	5.0	177.055	少量	少量		P89	37.0	41.0	16.0	176.895			
P36	30.0	33.0	7.0	177.035				P90	28.0	42.0	9.0	176.895			
P37	34.0	－	24.0	177.055	多量	多量	瓦質器１点	P91	26.0	28.0	14.0	176.895			
P38	60.0	78.0	31.0	177.005	少量	少量		P92	30.0	－	33.0	176.845			
P39	22.0	27.0	15.0	177.115				P93	16.0	25.0	16.0	176.825			
P40	48.0	49.0	15.0	177.115				P94	32.0	44.0	15.0	176.895			
P41	－	－	6.0	177.125				P95	34.0	34.0	28.0	176.905			
P42	46.0	62.0	7.0	177.105				P96	35.0	38.0	30.0	176.885			
P43	24.0	25.0	7.0	177.105				P97	23.0	33.0	5.0	176.855			
P44	49.0	70.0	19.0	177.085	少量	少量		P98	24.0	29.0	4.0	176.835			
P45	55.0	60.0	27.0	177.085				P99	30.0	52.0	24.0	176.825	少量	少量	
P46	29.0	40.0	19.0	177.085	少量	少量		P100	39.0	68.0	16.0	176.835	少量		
P47	28.0	44.0	21.0	177.085	少量	少量		P101	22.0	31.0	7.0	176.845			
P48	20.0	22.0	17.0	177.085				P102	30.0	46.0	－	－			
P49	30.0	38.0	20.0	177.065		少量		P103	36.0	38.0	2.0	176.825	少量	少量	
P50	44.0	－	22.0	177.085	少量	少量		P104	39.0	42.0	13.0	176.825			
P51	28.0	31.0	10.0	177.045				P105	38.0	38.0	32.0	176.815	少量	少量	
P52	34.0	68.0	15.0	177.085	少量	少量		P106	34.0	44.0	18.0	176.835	少量		
P53	31.0	40.0	16.0	177.085				P107	32.0	36.0	16.0	176.815	少量	少量	
P54	48.0	86.0	22.0	177.075				P108	－	－	23.0	176.825	少量		

第１表　遺構計測表（2）

遺　構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	表出面標高 m	炭化物	焼土	摘　　要
P109	34.0	56.0	18.0	176.815	少量	少量	
P110	29.0	35.0	—	176.825	少量	少量	
P111	26.0	29.0	13.0	176.775			
P112	26.0	48.0	7.0	176.925			
P113	28.0	42.0	4.0	176.915			
P114	26.0	28.0	11.0	176.905			
P115	26.0	30.0	5.0	176.875			
P116	22.0	32.0	8.0	176.865			
P117	34.0	40.0	4.0	176.865			
P118	26.0	28.0	6.0	176.855			
P119	54.0	64.0	7.0	176.855			
P120	20.0	23.0	5.0	176.785			
P121	23.0	26.0	4.0	176.725			
P122	20.0	30.0	8.0	176.735			
P123	17.0	34.0	10.0	176.735			
P124	21.0	22.0	11.0	176.635		少量	
P125	22.0	24.0	3.0	176.585			
P126	27.0	46.0	11.0	176.535		少量	
P127	17.0	20.0	14.0	176.545			
P128	37.0	39.0	7.0	176.565	少量	少量	
SK01	78.0	—	9.0	177.095	少量	少量	陶磁器6点・土師質土器1点 金属類3点・鉄滓3点
SK02−1	72.0	160.0	13.0	177.075	少量	少量	陶磁器1点
−2	—	—	19.0	177.045		多量	陶磁器1点・擂鉢1点
SK03	58.0	75.0	17.0	177.085	少量	少量	陶磁器1点
SK04	74.0	97.0	8.0	177.075	少量	少量	
SK05	38.0	62.0	6.0	177.035			
SK06	38.0	—	18.0	177.055	少量		
SK07	50.0	—	15.0	177.085	少量	少量	瓦3点
SK08	76.0	84.0	11.0	177.105	少量	少量	陶磁器2点
SK09	48.0	104.0	13.0	177.065			陶磁器1点
SK10	36.0	—	17.0	177.075	少量	少量	陶磁器1点
SK11	24.0	—	7.0	177.075	少量	少量	
SK12	32.0	59.0	9.0	177.075			
SK13	63.0	82.0	20.0	177.085	少量	少量	
SK14	50.0	60.0	18.0	177.065			
SK15	50.0	64.0	12.0	177.065			
SK16	60.0	102.0	42.0	177.065	多量	多量	石器剥片1点・陶磁器1点
SK17	80.0	118.0	6.0	177.055	少量	少量	土錘1点
SK18	58.0	—	37.0	177.055	少量	少量	陶磁器1点・瓦1点
SK19	—	—	11.0	177.045	少量	少量	鉄滓1点
SK20	24.0	70.0	11.0	177.055	多量	多量	石器剥片1点
SK21	110.0	—	17.0	176.925			
SK22−1	60.0	—	37.0	176.905			陶磁器1点・金属類1点
−2	—	—	29.0	176.885	少量	少量	
SK23	50.0	89.0	12.0	176.925			
SK24	66.0	74.0	23.0	176.905	少量	少量	
SK25	35.0	88.0	48.0	176.935	少量	少量	鉄釘1点
SK26−1	—	—	34.0	177.015			
−2	—	—	33.0	177.015	多量		陶磁器1点・鉄滓1点
−3	—	—	30.0	177.035			
−4	—	—	38.0	177.055			
−5	—	—	23.0	177.045	多量	多量	
−6	—	—	30.0	177.055			
−7	44.0	80.0	37.0	177.045			
−8	44.0	—	31.0	177.085			
SK27	38.0	54.0	6.0	177.055	少量	少量	

遺　構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	表出面標高 m	炭化物	焼土	摘　　要
SK28	48.0	78.0	24.0	177.065	少量	少量	土師質土器1点
SK29	78.0	98.0	23.0	177.105	少量	少量	
SK30	53.0	76.0	22.0	177.115			
SK31	68.0	90.0	28.0	177.075	少量	少量	
SK32	56.0	88.0	10.0	177.115			
SK33	62.0	68.0	17.0	177.085	少量	少量	
SK34	—	—	15.0	177.085		少量	
SK35	57.0	60.0	34.0	177.125			陶磁器1点
SK36	90.0	—	32.0	177.105	少量	少量	陶磁器1点・瓦1点
SK37	52.0	101.0	18.0	177.085	少量	少量	
SK38	48.0	96.0	15.0	177.115	多量	多量	
SK39	36.0	47.0	17.0	177.115	少量	少量	
SK40	34.0	162.0	54.0	177.105	少量	少量	砥石1点
SK41	40.0	118.0	13.0	177.055	少量	少量	
SK42	40.0	132.0	19.0	177.025	少量	少量	陶磁器1点
SK43	72.0	120.0	20.0	177.055	少量	少量	石器剥片2点
SK44	60.0	92.0	22.0	177.075	少量	少量	
SK45	56.0	108.0	36.0	177.075	多量	多量	
SK46	76.0	—	19.0	177.075			陶磁器2点
SK47	48.0	—	32.0	176.985			
SK48	47.0	76.0	21.0	176.955			
SK49	39.0	59.0	25.0	176.955			
SK50	34.0	50.0	15.0	176.925			陶磁器2点
SK51	34.0	77.0	12.0	176.895	少量	少量	
SK52	54.0	106.0	48.0	176.815	少量	少量	金属類1点
SK53	36.0	96.0	15.0	176.905			
SK54	34.0	63.0	8.0	176.815			
SK55	155.0	—	19.0	176.845			
−P01	32.0	52.0	19.0	176.845			
SK56	118.0	156.0	28.0	176.795	多量	多量	陶磁器1点・瓦質器9点
SK57	44.0	—	15.0	176.915			
SK58	42.0	—	17.0	176.835			
SK59	64.0	112.0	33.0	176.815			陶磁器3点
SK60	116.0	—	18.0	176.735	多量		瓦質器1点
SK61	54.0	—	11.0	176.705			陶磁器1点
SK62	22.0	—	17.0	176.735	少量		
SK63	42.0	50.0	4.0	176.725			
SK64	130.0	—	23.0	176.815			陶磁器4点
SK65	120.0	186.0	39.0	176.795			陶磁器3点・中国製青磁2点
SK66	62.0	76.0	11.0	176.695			
SK67	40.0	64.0	10.0	176.545	多量	少量	
SK68	60.0	64.0	13.0	176.685		少量	陶磁器1点・金属類42点
SK69	18.0	90.0	19.0	176.635	少量		
SK70	40.0	48.0	12.0	176.665	少量	少量	
SK71	44.0	74.0	5.0	176.555	少量	少量	
SK72	84.0	156.0	16.0	176.495	少量	少量	
SK73	48.0	90.0	6.0	176.405	少量		
SK74	130.0	330.0	16.0	176.645			
SK75	120.0	200.0	26.0	176.825			切出ナイフ1点
SB01	—	440.0	73.0	177.025			
−P01	30.0	32.0	—	176.865			
−P02	46.0	50.0	—	—			
−P03	20.0	29.0	18.0	176.695			
−SK01	84.0	108.0	57.0	176.865			
SI01	230.0	342.0	8.0	176.835			



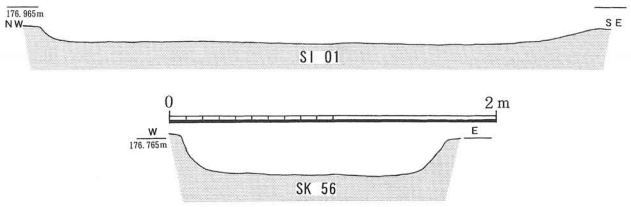
第10図　遺構断面図（3）

このなかでSK17（第８図・図版3－8）はA－１調査区の南西端に確認されたもので，長径約118㎝，深さ16㎝を測り，表出面には10～20㎝大の角礫などが数個混入した状況であった。その坑形から土坑と判断したものであって，陥入土は坑内下部に１・２層の土質が混入するとともに３層の黒褐色土も捉らえられた。共伴遺物としては土錘の１点を確認出来たが，その土坑の性格は不明である。なお周辺にはP30・P35・SK20・P37等も確認されており，SK17と一直線上に結ばれることから，その前後関係を調べるため図化している。そのなかでP30・P37からは共伴遺物として陶磁器・瓦質土器片が１・２点出土しており，またSK20からは安山岩製の剥片（第17－8図・図版5－5）も出土しており，削平等の影響で撹乱を呈し，中世以降に構築されたとも考えられるが，その性格は明らかでない。

そして掘立柱建物跡とするSB01（第９図・図版４－1・4－5）は，A－２・A－４調査区間のその中央部西壁付近に確認されたもので，現検出面における長径約440.0㎝を測るものであった。そこからは多量の焼土塊および10㎝大の鉄滓数個，また陶磁器類や土師質土器，炭化物等が共伴遺物として出土したもので，その内部の柱穴・土坑等は他の遺構群と区別を計るためにSB01－P01を起点として右まわりに－P02・－SK01・－P03と称名したのだった。その－P01内には腐食した残柱部分が確認されて，その下部には根石等の土台石は検出されなかった（第９図・図版5－6・5－7・5－8）。それと同様に隣在する－P02・－SK01においても約１間（約1.8m）の間隔をもって掘立式の形態がみられたものと想像出来る。一方，陥入土には混合土としての黒褐色粘質土やブロック状に入り込んだ橙褐色土等を捉えられたが，堆積状況は明確ではなく（図版6－1・6－2），機能的に言えることは鍛冶工房的なもの，なかでも野炉場の可能性が高いと思われたことである。これは周辺のSK01・SK02（図版4－1）やSK26（図版4－6・6－3）においても，同様に焼土塊や炭化物および陶磁器（図版3－7）等が多量に確認されることからも，この周辺域（A－２・A－４調査区間の中央から北西付近）は，鍛冶工房としての要素の強いことが判る。しかしながら製造工程等の機能的側面の具体性を伴わないことから，構築年代等において中世以降のものとして言及するにとどめたい。

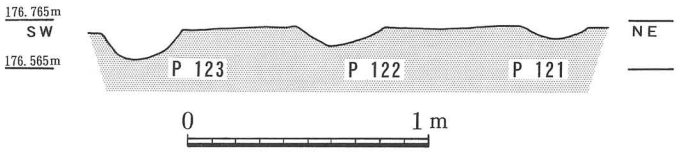
そしてA－３調査区においては，P55（図版3－5）の焼土塊の

出土や，SK38（図版4－3）・SK43（図版4－4）などの焼土・炭化物等の出土も確認されているものの，野炉的とは捉え難く，一方でA－4調査区のSK28（図版3－6）から出土した土錘などを製作した場とも考えられるが具体性はなく，その性格は不明である。



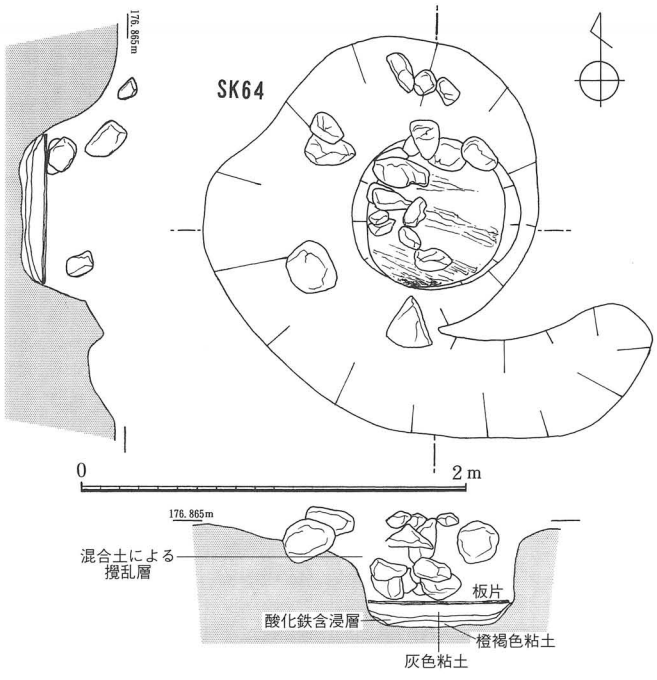
第11図　遺構断面図（4）

そのような状況下において，SK26の下方に位置するSK31（第10図）に着目してみると，それは長径約90cm，深さ約28cmの土坑で，床面から約20cm地点に割石（礫）が位置しているもので，これを端として北東－南西方向および南東－北西方向にのびる遺構群に，一定の間隔（2m前後＝1間）をもった位置関係を読みとることができる（第10・14図）。これからSK26を含むSK37・SK41（もしくはP57か）・SK33を4隅の端点とするならば，北東－南西方向に長い方形の掘立柱建物跡を想定できるもので，各々対応すると思われる遺構にそって見ると，3間×2間の造りと考えられる。またそれらの柱穴・土坑群には，大半は礎石的役割をもつと考えられる割石などの礫を含んでいたり（図版4－7），2層の灰褐色土の陥入，および共伴遺物としての陶磁器類・焼土塊・炭化物等の出土など共通するものも多く，したがって本稿で問題とする中世期に該当するものとして捉えている。

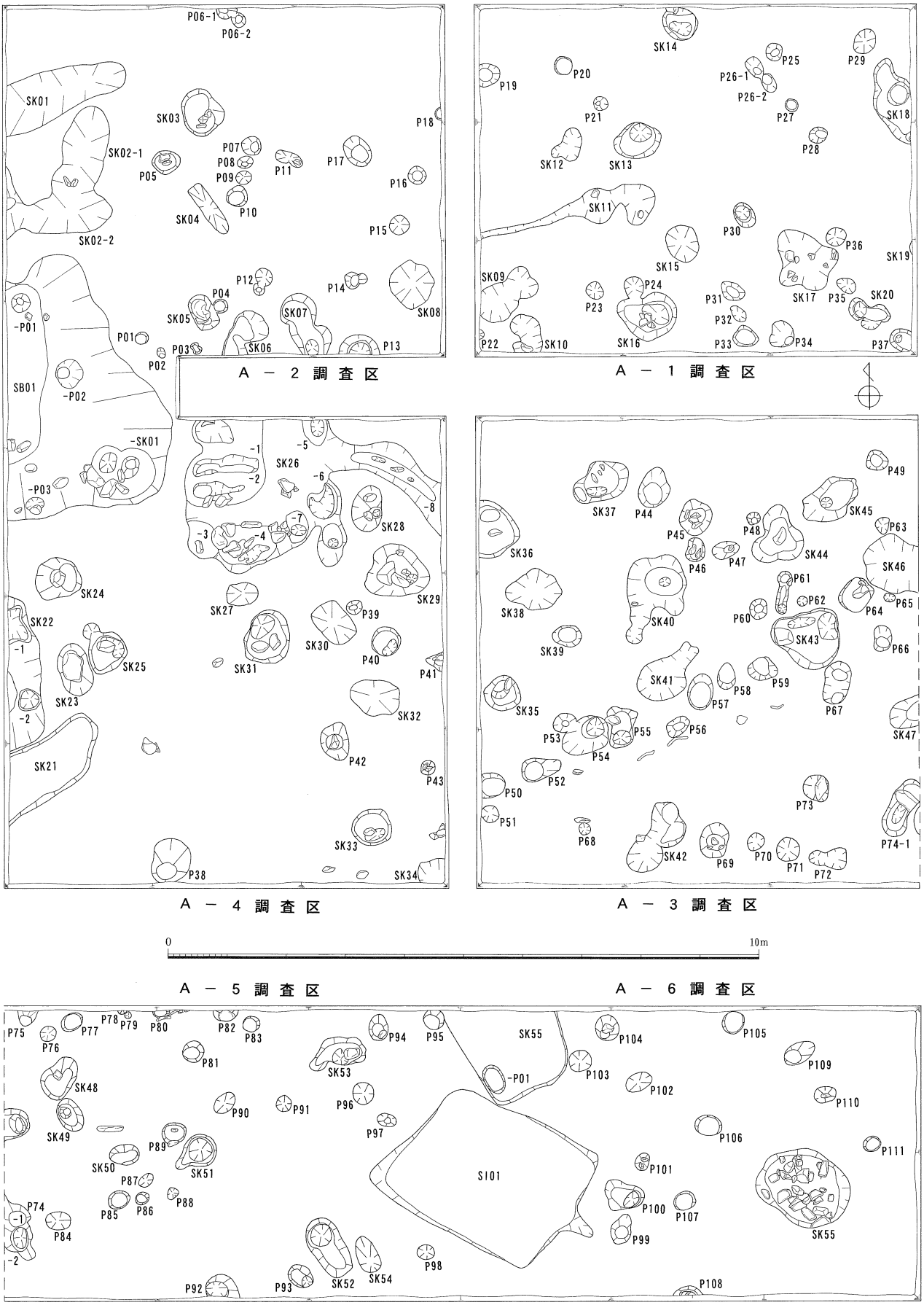


第12図　遺構断面図（5）

一方，A－5・6調査区には，その中央部分に竪穴住居址としたSI01（第11図・図版4－8）を確認することができ，それは炉かカマドと思われる突出部をもつものであった。長径は約3.4m，深さ約10cm程度のものであり，約3m×2mの長方形状を呈して，北西－南東方向に位置するもので，その遺構内には柱穴および遺物などは検出されず，また陥入土としては砂質性の黒灰色土を確認できたものである。その外周は支柱跡と思われる柱穴，例えばP97～P100などが残っていて，その構築年代は古墳時代以降のものと想定している。またA－6調査区の東端には長径約1.6m，深さ約25cmを測るSK56（第11図・図版5－1・6－4）を確認できる。その坑内には，床面付近に多数の意図的に配置されたと考えられる集石群を検出できて，おそらく羽釜等の，胴部に押印を施され

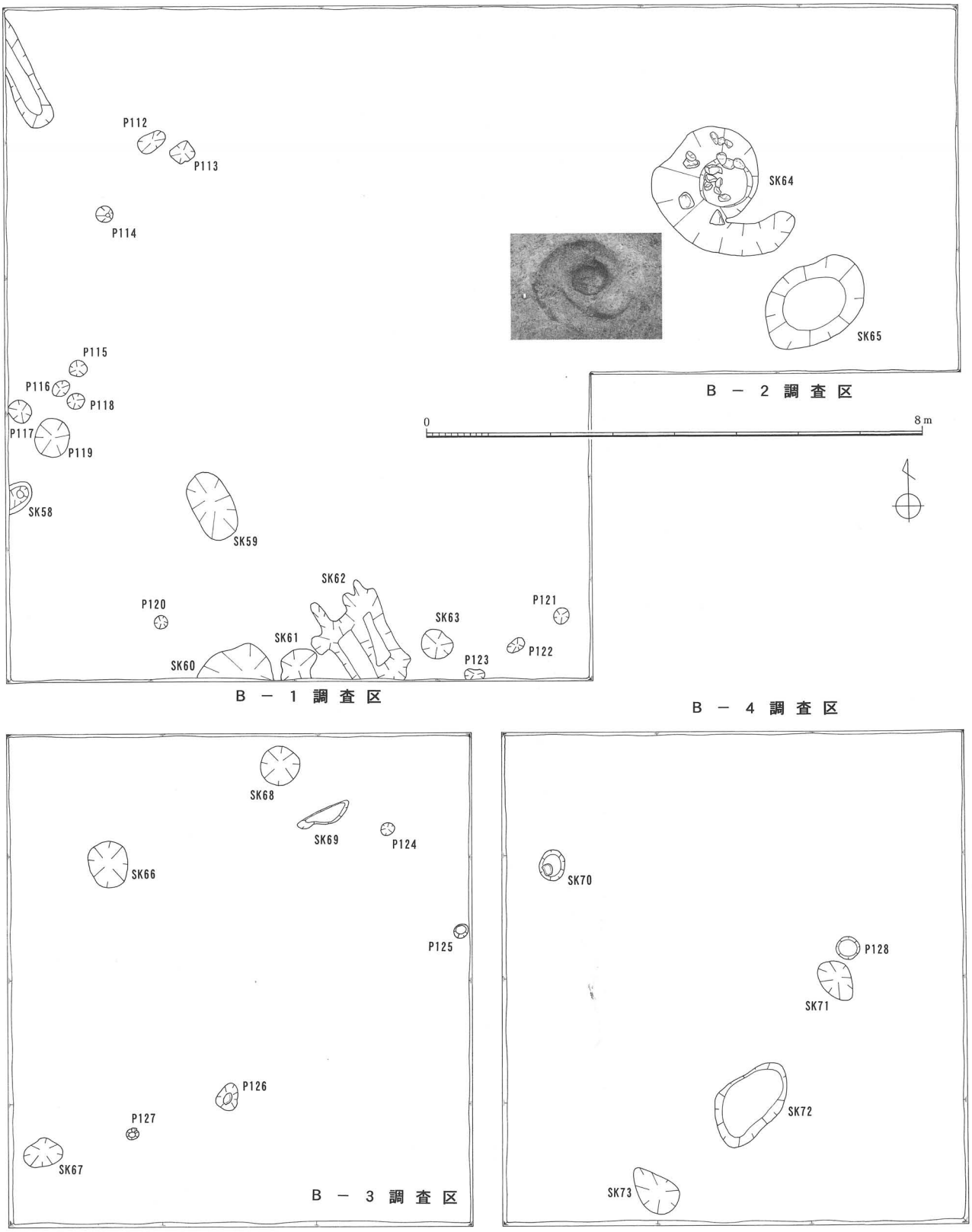


第13図　遺構断面図（6）



第14図　遺構指示図（1）

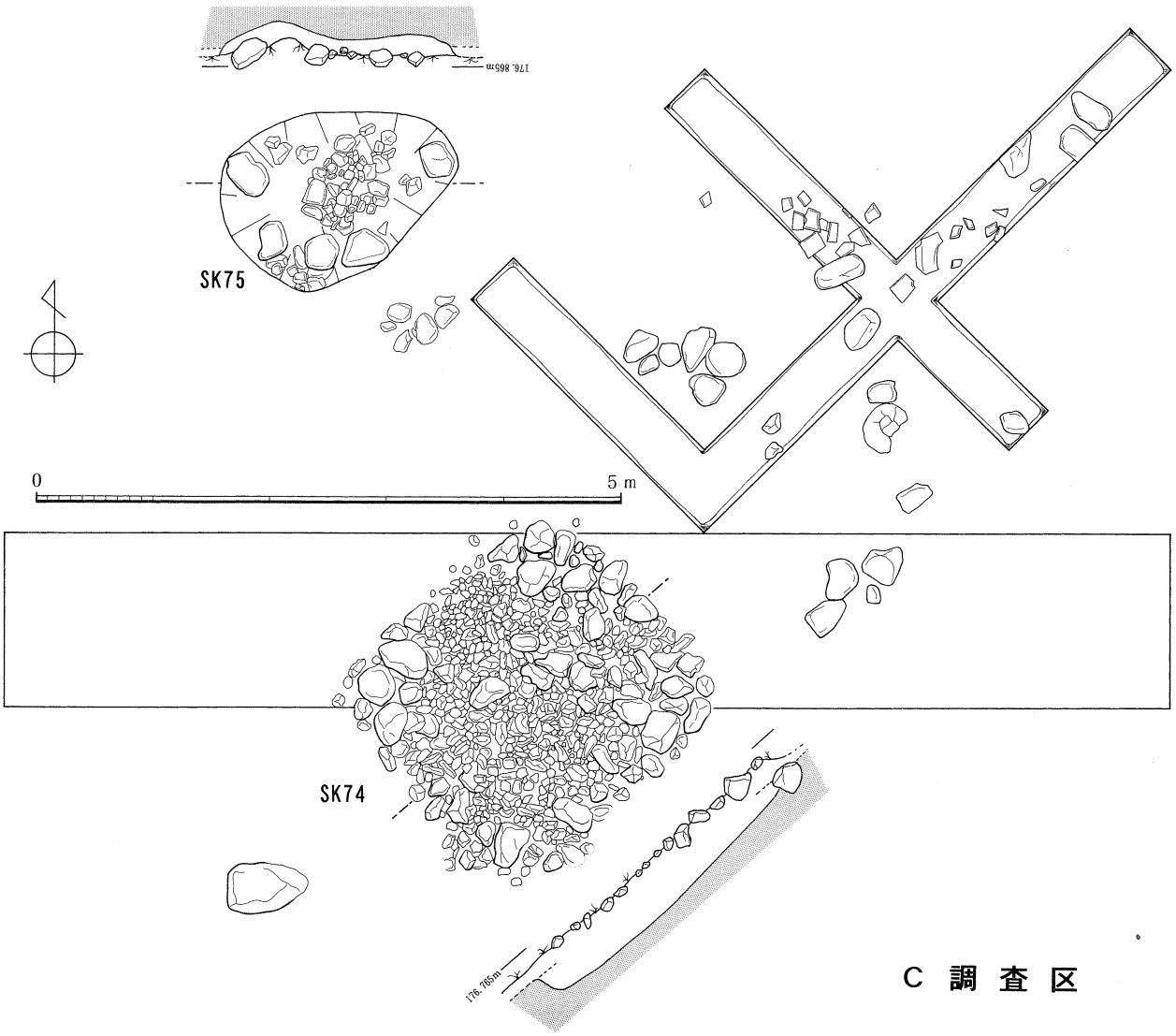
た瓦質土器片を多数確認出来たのである。また同時に焼土塊・炭化物等も多数検出できたことから，炉的性格をもつものとして捉えている。



第15図　遺構指示図（2）

B調査区（第15図・第１表）　A調査区に較べて，遺構・共伴遺物数は減少しているが，過度の削平から層位的に攪乱を呈した状況がうかがわれ，なかには共伴遺物として中世期の輸入および国産陶磁器類の出土も確認できたものもある。遺構としてはB－１調査区のP121・P122・P123（第12図・図版5－2）のような柱列もみられるが，その性格は明確ではない。

一方，B－２調査区の中ほどに位置するSK64（第13図・図版5－3）においては，その特異な形状から四分法に基づいて精査を行ったものである（図版6－5・7－7）。長径約2.4m，深さ約37㎝を呈するこの土坑は，坑内に10数個の円礫とともに，黒褐色土の陥入を確認できるが，共伴遺物等は確認出来ない状況であった。そして底部には，腐食はしているものの５mm程度の厚みをもって並べ敷かれた円形の板組が検出されて，その直径は約80㎝を測るものであった（図版6－6・6－7・6－8）。なおその下部には，灰色粘土・酸化鉄層・橙褐色粘質土のような順層を呈して，遺物等の共伴はみられなかった。この巴状を呈するその意図は判かりにくいものの，機能的にみれば厠としての利用目的であったと想像している。



第16図　遺構指示図（3）

B－3・B－4調査区においては，調査頭初，桑畑としての利用を確認しており，その関係からか過度の削平が行われていた状況であった。なお全体に遺構面は少なく，顕著なものは検出できなかった。

C調査区（第16図・第１表）　C調査区は，東端域に設定したｆ字状トレンチ，および隣接するSK74・SK75を指すものである。この東側の傾斜地には円礫の積石を確認出来るがその使途は不明で，それは調査対象域の南端域にみられる積石状況（図版7－5）とよく似ているものであった。

ｆ字状トレンチは，頭初立地的に水の溜まりやすい場所であり，それが庭園などの人工的なものかを確認するために拡張した設定区であった。結果的には，河床礫とともに多数の瓦片が散見できたにすぎず，その瓦片は旧小学校の取り壊しに因るものだと解される。またSK74（第16図・図版5－4・7－1）は１辺が約2.3mを測る方形状の石積み遺構で，それは北西－南東方向に面しているもので，その約40㎝下部からは少量の小骨（図版7－3）片および，それに伴って切り出しナイフも出土している状況から墓場として捉えてみたのである。ただし，石積みの比較的新しいことからみて，後世における２次的な加工も考えられる。このように死者の上に刃物を置くという民俗風習は，あの世（来世）とこの世（現世）とを断ち切ることを意味することとされており，これらから構築年代は２次的な加工と捉えるならば，近世以降と解している。そしてSK75（第16図・図版7－2）は，径約２m，深さ約20㎝程度の皿状を呈しており，表出面には拳大から30㎝大の礫が密である。小墓とも考えられるが明確ではなく，その性格は不明である。

なお，最後にベルト等を部分的に遺したことについては，今までの調査から全体像が浮き彫りにならないと判断したとともに，時間的制約も関係していたことを申し述べておきたい。

（山本　浩之）

《参考文献》

千田嘉博・小島道裕・前川要著『城館調査ハンドブック』新人物往来社
広瀬町教育委員会『一飯梨川中小河川改修事業に伴う一富田川河床遺跡発掘調査概報』　1988年３月
柿木村教育委員会『唐人焼窯跡発掘調査概報』1982年
『戦国時代の殿屋敷遺跡』匹見町教育委員会　1999年３月

第4章　出　土　遺　物

第1節　はじめに

本遺跡における出土遺物は，時期的に大別して縄文・中世・近世（近代・現代も含む）の3期に仕分けできる遺物ということができる。これらは総数約2000余りにのぼるが，捉え方が難しい骨片や焼土あるいは炭化物などは，採集しているものの，総て集計表には表示していない（第2表）。これらの出土遺物の中から，遺跡を特徴付けるに該当するものを中心としてみていくことにする。

以下簡略であるが，私なりに観ていこうと思う。なかには思い違いの部分もあると思われるが，ご容赦いただければと思うものである。なお，陶磁器関係については，広島県立美術館の村上勇氏にご教示をいただいたものである。

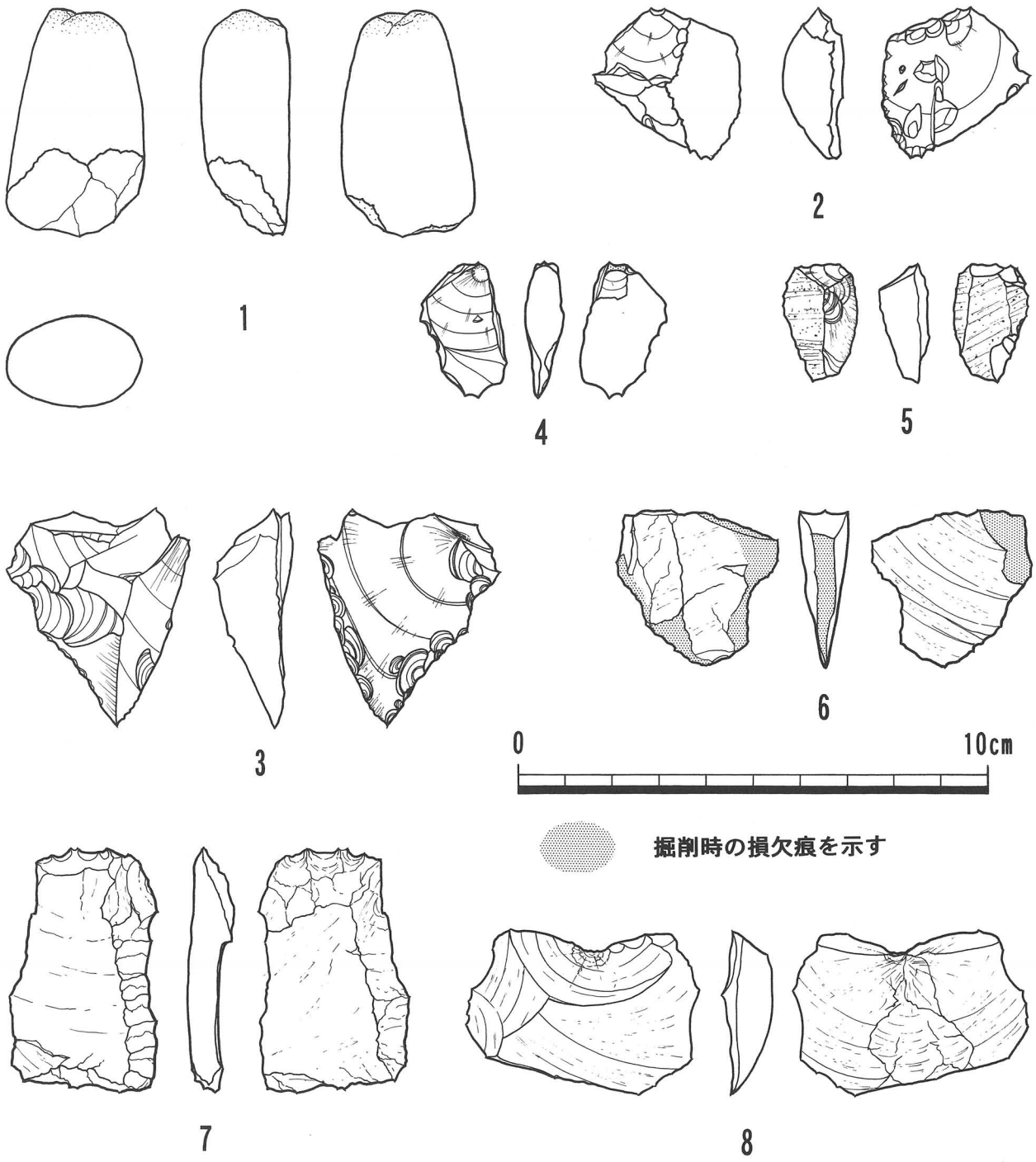
第2表　出土遺物集計表

	石器剥片	石　錘	黒耀石	チャート	陶磁器片	瓦質土器	土師質土器	鉄製品	鉄　滓	銅製品	瓦	土　錘	砥　石	銭　貨	合　計
A－1区	1			1	113	8	1	5			3	2			134
A－2区				1	158	1		12		1	51				224
A－3区	1		4		180	6	2	35	4	1	4				237
A－4区	3	2	5		321	7	1	6	7		68	6			426
A－5区			1	1	38	7		3			29				79
A－6区					18	2		1			33				54
B－1区	3			2	234	3	1	36						1	280
B－2区					168	3	2	11		1	6				191
B－3区			2		140	3	1	15			2				163
B－4区					83	2					13				98
C　区					2	2		1							5
D　区					10	4		4							18
A－2・4ベルト					2				4						6
A－5・6ベルト					3			1							4
遺構共伴遺物合計	5		1		49	23	3	48	8		14	1	1		153
合　計	13	2	13	5	1519	71	11	178	23	3	223	9	1	1	2072

第2節　実測遺物

1．縄文遺物類

石器・剥片類（第17図・図版8－1）　1は，A－4調査区の1・2層から出土したもので安山岩製の石錘と思われるもの。それは損壊しているものの，全体にやや偏平な楕円の丸みを帯びたものとして捉らえられ，またその上端部には，切目と考えられるきざみをうかがうことができる。おそらくは漁具としての使用を想像できるもので，色調は灰褐色でザラザラ感を呈するものである。2は，A－2調査区の出土で，こげ茶色の色調を呈したチャート製の剥片である。それは腹面上，左斜めやや上方からの加撃による剥離ののち，2次的な加工として背面上部，およびその側縁からの調整が成されたと思われる。同質のチャートは，四国地方に多く産するものである。3は，良質な黒耀石製の剥片で西九州地方の産出と思われるもの。これは打瘤を遺す腹面上部からと，また背面においては，少なく



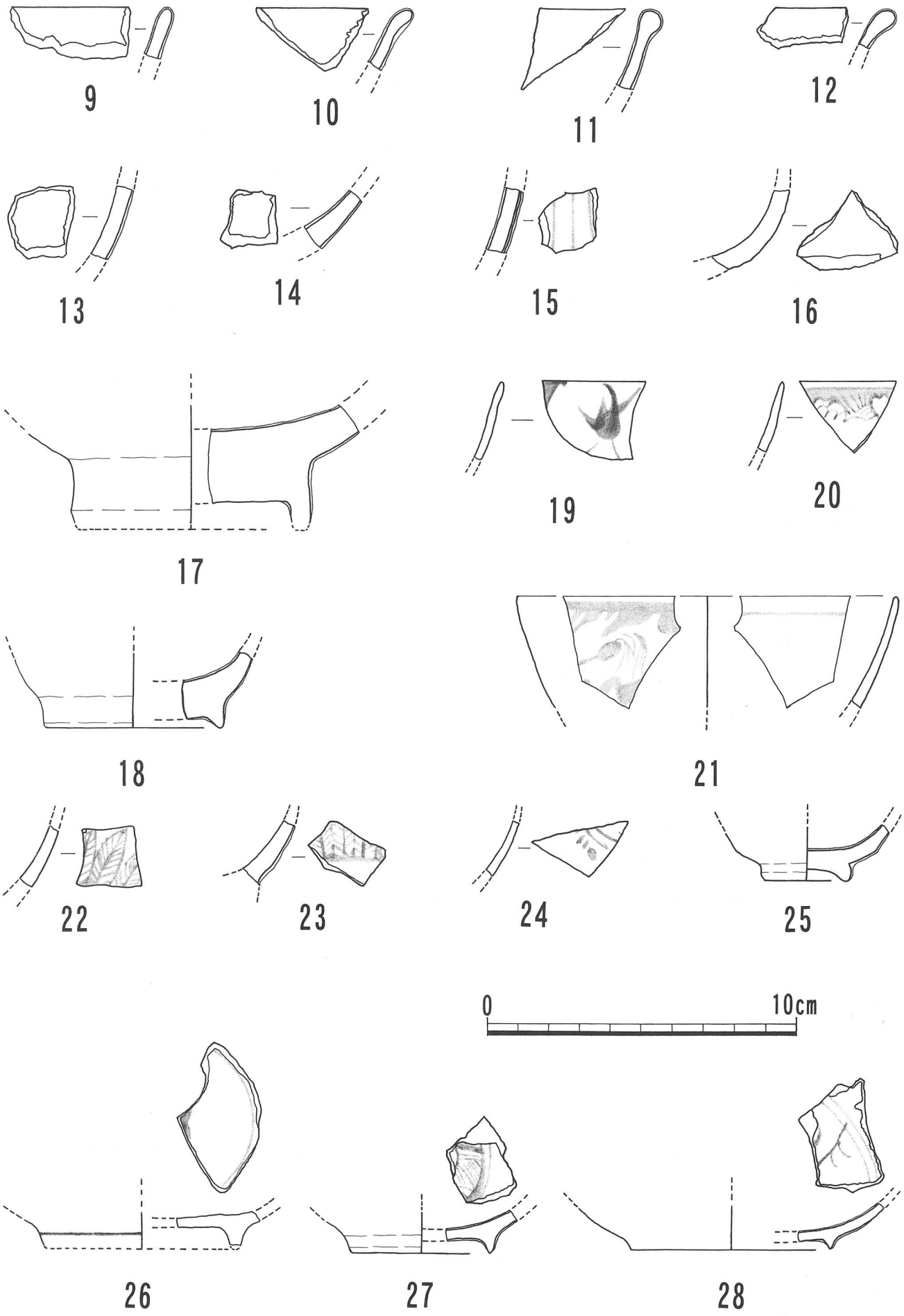
第17図　石器・剥片類実測図

とも２側面からの加撃による剥離調整を成され，ほぼ三角の形状を保つもので，その剥離面には，リングおよびフィッシャーをよく遺している。４と５も黒耀石製の剥片で産出も同じと考えられるもの。このうち４は，自然面を遺す腹面に対して，背面に打瘤および打瘤裂痕を遺すもので，そこにはフィッシャーやリングもみられ，右肩上方からの加撃を想定できるものである。また５は，良質のもので３剥離面で構成された背面をもち，そのうち上右半の２面においては，最初の剥離と思われるもの。６は安山岩製の剥片で，側面からの加撃を受けたもの。風化のためか，背・腹面ともに灰色を呈している。既述の３～６はいずれも，A－４調査区の１・２層出土のものである。

7・8も同質の安山岩製剥片で，7はA－3調査区出土，8はA－1調査区・SK20出土のもので，いずれも採上げは1・2層である。前者はやや岩質の落ちるもので，刃部とした背，腹面側縁部は，おそらくその周辺からの調整によるもので，その使用痕は定かでない。また後者は，背面に円錐状裂痕や打瘤を遺すことから，上方からの加撃による剥離状況を容易に示すもので，風化のためか背・腹面とも灰色を呈している。

2．中世・近世遺物類

陶磁器類（第18・19・20図・図版8－1・8－2・8－3）　9～18は，青磁片で，16以外は中国製であると想定されるもの。そのうち9は，B－4調査区の1・2層出土のもので，碗の口縁部。外面の口縁端部下は内湾してややくぼみ，その口縁端部に至っては，円みを帯びて内面へと続いている。釉調は淡緑色，胎土の色調は灰白色で緻密なもので，おそらく15世紀頃のものと思われる。10も碗の口縁部で，A－4調査区出土のもの。それは胴部から口縁部にかけて弧状に外反していて，その口縁端部は，胴部の器肉よりやや細まって円みを帯びている。また胴部外面には，僅かに陰刻文もみられていて，その釉調は淡緑色で，胎土の色調は灰色で緻密なもの。これは15世紀でも末頃のものと思われる。11も同様のものでA－2調査区のP08から出土したものである。口縁端部は円みを帯びながら，その分だけ外側に張り出した形状を呈していて，やや内湾しながら胴部へと続いている。施釉は薄く，釉調は暗緑色のもので，胎土は灰～灰褐色を呈して，全身に氷裂文を生じている。これは15～16世紀のものと想定される。12は，同調査区から出土した口縁部片。胴部から口縁部にかけてやや外反しながら，ゆったりと円みを形成して端部を構成している。釉調は明緑色で，また胎土は密で灰褐色を呈しているものである。13は，A－6調査区出土のもので，施釉は内面に薄く，外面はやや厚く施されていて，おもに内面に細かい氷裂文を生じている。釉厚の差から生じるのか，釉調は淡緑色の内面に対して，外面は暗緑色であって，そしてその胎土は密で灰色を呈する。15～16世紀初頭のものと想定されるもの。また14は，A－4調査区出土のもので，碗の腰から胴部附近と思われるもの。内面には僅かであるものの陰刻文を施されていて，また施釉面には氷裂文を生じている。判別は難しいが，胎土はおそらく陶土質の密なもので，茶灰色を呈して，釉調は暗緑色である。15世紀頃のものであろう。15は，D調査区から出土したもので，碗の胴部片であると思われる。これは外面に陰刻した細線を施すことで，その部分を濃く線状に浮かびあがらせたもので，「細線描蓮弁文碗」と呼称されている。釉面には氷裂文を生じていて，またその釉調は明緑色であり，胎土は緻密で灰白色を呈している。これも15世紀末頃のものと思われる。さて16は，A－4調査区から出土した碗の高台脇部片である。施釉部と土見せとが明確であって，所どころ釉垂れや飛釉などをみられるもの。器肉はやや厚めで，高台脇から腰部にかけて弧状に婉曲した形状を保ちながら，また施釉は薄く，その面上には無数の氷裂文を有している。釉調は淡緑色，また胎土の色調は灰白色で緻密であって，江戸時代に作られた国内産と想定できるものである。17は，D調査区から採取した高台部片で，碗か皿と想定できるもの。その見込み底の器肉は厚く，およそ2.5㎝を測るもので，体部はなだらかに婉曲して高台付け根と，さらに高台外の下方でも屈折して接置面へとつづく形状を呈している。また施釉は薄く，高台内の底面を除いてかかっていて，その釉面上には無数の氷裂文を有している。その見込み内部の底面には陰刻

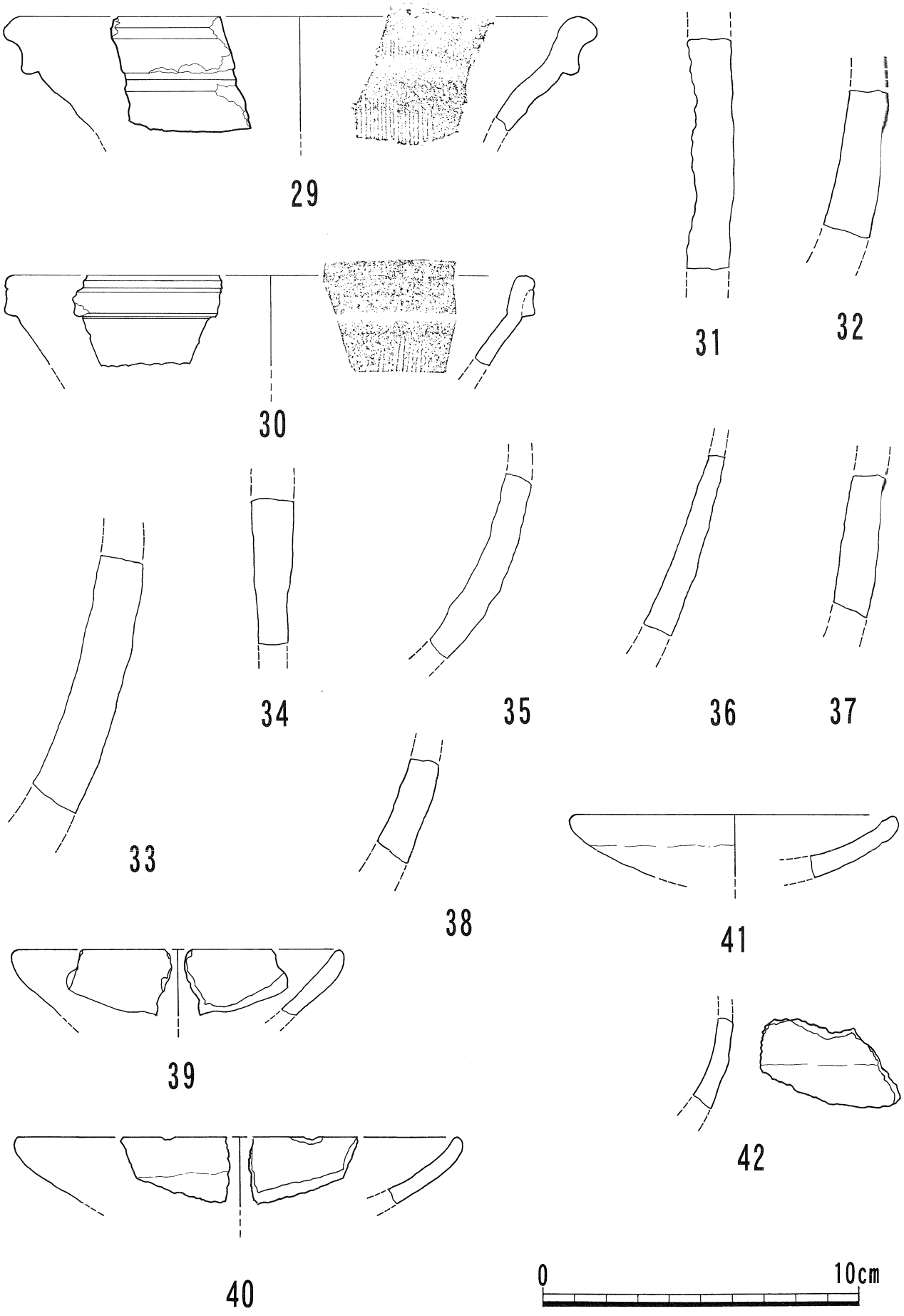


第18図　陶磁器類実測図（1）

文が施されていて，何かの模様として浮かびあがっているもので，釉調は暗緑色，また胎土の色調は部分的に褐色味をさすものの灰黄色な密であり，15世紀頃のものと考えられる。同様な高台部片でも18は，A－4調査区から出土したもので，17と比べて高台は低く，また全体に小振りなものである。釉面には気泡痕が点在して，高台附近の内湾する部分には，釉が厚く溜まっている。釉調は淡い明黄緑色で，胎土の色調は灰白色で緻密である。

19～28（図版8－2）は，中国製の輸入陶磁器類と想定されるもの。そのうち19は，口径およそ7㎝を測る染付碗の口縁部片で，A－2調査区から出土したものである。体部は，やや丸味を帯びて立ち上がり，口縁部附近でわずかにふくらみをもちながら，鋭角を成す端部へと続いている。器肉は全体的に0.2～0.3㎝を測って薄く，内外面には透明度の高い釉を施している。胎土には白色で緻密であり，その外面は呉須による草花文を施されていて，16世紀頃と想定できるもの。20も，A－4調査区から出土した染付碗の同部片である。体部は丸味を帯びて立ち上がり，その端部は丸味は帯びるものの，やや押しつぶされた角状を呈している。釉は透明で内外面に施され，釉中には細かな気泡を多数含んでいる。また内外面には呉須による染付を施されており，口縁端部内外には，それと平行する一条線，および外面条線下には，草花文と思われる文様を施されてているもの。胎土は青白色で緻密であり，16世紀中頃のものと想定できる。21も染付碗の同部片であって，これはA－1調査区のP24から出土したものである。口径はおよそ15㎝を測って体部は，なだらかな弧を描いて立ち上がり，口縁部辺においてやや内反している。器肉は0.2～0.4㎝を測ってやや薄く，また胎土は陶土質で，黄白～黄褐色を呈して密である。内外面とも黄白濁釉を薄く施されて，その面上には氷裂文を無数に生じている。また火を受けた影響からか，全体的にややくすんだ感じを呈しており，そのため染付を主とする外面は，おそらく草花文であると感じている。これも16世紀の後半と想定できるもの。

22・23は，染付碗の胴部および高台脇部片で，いずれもA－4調査区から出土したものである。これらは同一固体のものと思われ，その胎土は灰白色で緻密であり，内外面を覆う釉調は，半透明で青白色を呈しているもの。またその釉中には気泡を無数に含みながら，釉面上には強い光沢をもち，そして染付は，おもに外面に施されていて，草木類の葉を均一に描いている。いずれも16世紀中ごろのものと思われる。また24は，中国製と思われる赤絵の碗片である。これはA－3調査区から出土した小片で，器肉は薄くおよそ0.2㎝を測るもので，おそらく口縁部から腰部にかけての部分であろう。胎土は灰白色で緻密であり，またかけられている釉は薄く，胎土色に近いものであって，つやはほとんどなく鈍い発色を示すもの。おもに内面に施された赤絵の釉調は，くすんだ発色でつやはなく，ザラザラ感を呈することから，おそらく2度焼きの技法により，赤絵具を低火度で焼きつけたものであろう。16世紀ごろのものと想定される。25は，A－6調査区のSK56から出土した染付碗の下半部片である。高台の外面は，ヘラ調整により角状に突出した稜を成していて，そして胴部はゆっくりと開きながら腰部辺で内曲して立ち上がるもの。施釉は，高台外の稜より下部，および見込み内にみられる重ね焼痕以外にまんべんなくかかり，おもに碗の下半部では，釉切れや釉垂れがみられる。胎土は灰白色で緻密であり，釉調は失透性で青灰色である。また外面にみられる染付は淡藍色の一筆描きによるもので，またその産出は，景徳鎮ではない南方窯で，おそらく16世紀末のものと考えられる。そして26～28も染付皿か碗の高台片である。いずれも胎土は灰白色で緻密であり，そして釉は畳付を除く



第19図　陶磁器類実測図（2）

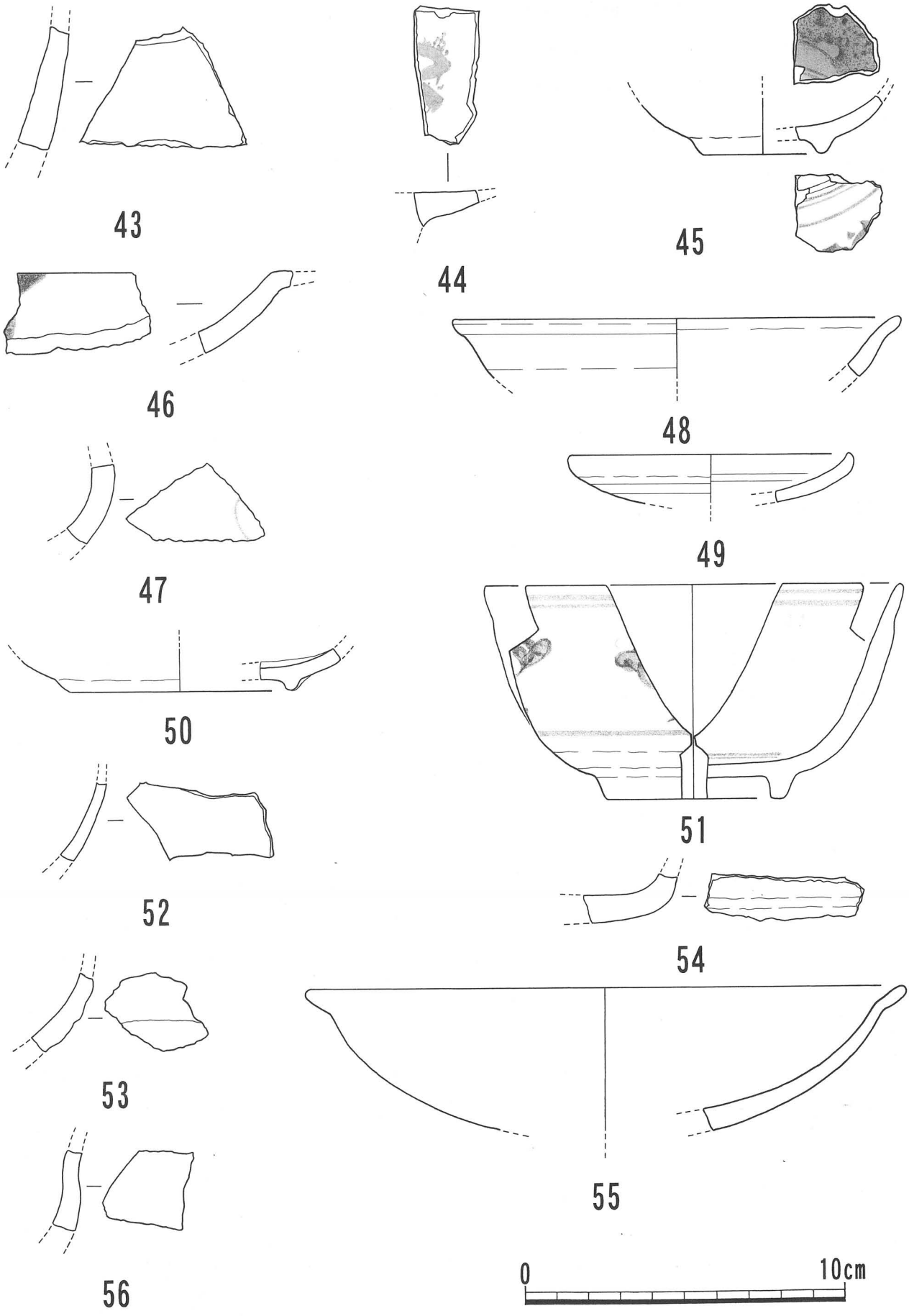
内外面に施されて青味がかった灰白色を呈している。なかでも28は光沢は強く，また器肉は比較するとおよそ0.2～0.3㎝を測って薄いものである。いずれも染付は内外面とも施されていて，見込み内面には1・2条の界線によって区画された中に文様を配していたり，また高台外辺には，27を除いて，これも1・2条の界線を施されている。これらは16世紀のもので，なかでも26・27はその半ば過ぎのものであろう。

29～56は国内産の陶磁器類と想定できるもので，そのうち36までは備前焼と思われる（第19・20図・図版8－2・8－3)。その29・30は擂鉢の口縁部片であって，前者はB－1調査区，後者はA－2調査区から出土したものである。これらはいずれも灰～灰褐色の胎土を呈して密であり，また器肉はおよそ0.5～0.8㎝を測ってやや薄手のものである。共通して体部はゆるやかに立ちあがり，外面の角状突出部を境に屈曲して口縁部へと続くもので，その突出部と端部との間隔は，前者の方が広く指一本分を呈している。また素焼きのため，ナデやヘラ調整痕がはっきり遺ることと，見込み内に連続した御目を呈することも共通している。どちらも江戸期のもので，前者は前期の須佐系のものと想定される。31～34は甕と想定できるものであって，31と34はA－3調査区の，そのうち前者はSK42から，一方32はB－3調査区，33はB－2調査区からの出土である。31は器肌・胎土とも褐色系できめが細かいのに対して，その他は胎土は灰色系できめが粗く，器肌は赤褐色を呈している。いずれも器肉はおよそ1.0～1.5㎝を測って厚く，また器肌に石はぜやナデ調整痕および，内面に叩き締め痕をわずかに遺すことは共通している。そして35・36はA－3調査区から出土した壷と思われるもので，そのうち前者は肩部片か。いずれも胎土は赤褐色で石粒を含んで密であり，また器肌は褐色系で石はぜやナデ調整痕を顕著に遺すものである。器肉はおよそ0.7～1.0㎝を測って薄いもので，また前者の体部は弧状に立ち上がっている。後者は，15世紀末～16世紀初めのものと思われる。

37・38は，それぞれA－3調査区・B－4調査区から出土したもので，後者は壷と思われるもの。いずれも九州系のもので，胎土・器肌は赤褐色を呈して緻密であり，釉面には光沢をもっている。おそらく江戸期のものと思われる。

唐津焼と思われる39～43のうち，41までは口縁部片であって，39・40はA－4調査区，41はB－4調査区から出土したものである。いずれも口縁部辺の造りは類似していて，外面にやや厚みをもちながら内湾する様子を呈して，その作風は小振りなものと思われる。39・41の胎土は，灰褐色～褐色を呈するのに対していて，40は淡灰色であり，いずれも密である。また全体的に施釉は薄く光沢をもつもので，39は生地色と類似した灰褐色と類似した灰褐色を呈して，成形の回転ロクロ痕によるザラザラした器肌を伴うのに対して，40・41は淡緑～暗緑色で，透明度の高い釉調を呈し，外面に露胎部をもつものである。さらに41は，外面にロクロ成形時の調整痕，および内面にはヘラ掻きの沈線を遺して，釉面上には氷裂文を生じている。いずれも江戸期頃のもので，17世紀の初頭から前期までのものと思われる。そして42・43は表面採集分などで，後者は鉢と思われるものである。いずれも釉面上に氷裂文および光沢を生じているもので，前者は41と酷似した釉調や胎土を有し，また後者は胎土・釉調とも緻密なもの。いずれも江戸期のもので，前者はその初期のものであろう。

また44・45は伊万里焼系のもので，それぞれB－4調査区・A－4調査区から出土した皿・碗の下半部片である。前者は灰白色で緻密な胎土を呈するのに対して，後者はくすんで黄色味を帯びたもの。



第20図　陶磁器類実測図（3）

いずれも染付を施されていて，前者はに呉須による淡い藍色を呈して，また後者は灰色と黒色との組み文様を作り出している。いずれも17世紀の中ごろのものと思われる。46は，A－4調査区のSK26－2から出土した碗の口縁部片である。それは端部付近で外反するものであって，その部分の表裏には稜線や沈線を伴っている。胎土は砂味を帯びた赤褐色を呈して密であり，おもに外面は光沢の強いものである。表裏面とも黄灰色釉をベースにしていて，その内面上には部分的に緑釉で絵付けを施されいる。これは18世紀の初めごろのもので，肥前系のキハラカラツと想定されるものである。47はA－3調査区から出土した九州系の陶磁片である。おそらく壷類と思われるもので，施釉は薄く，その釉調は灰青色であり，釉面上に氷裂文を伴うものである。

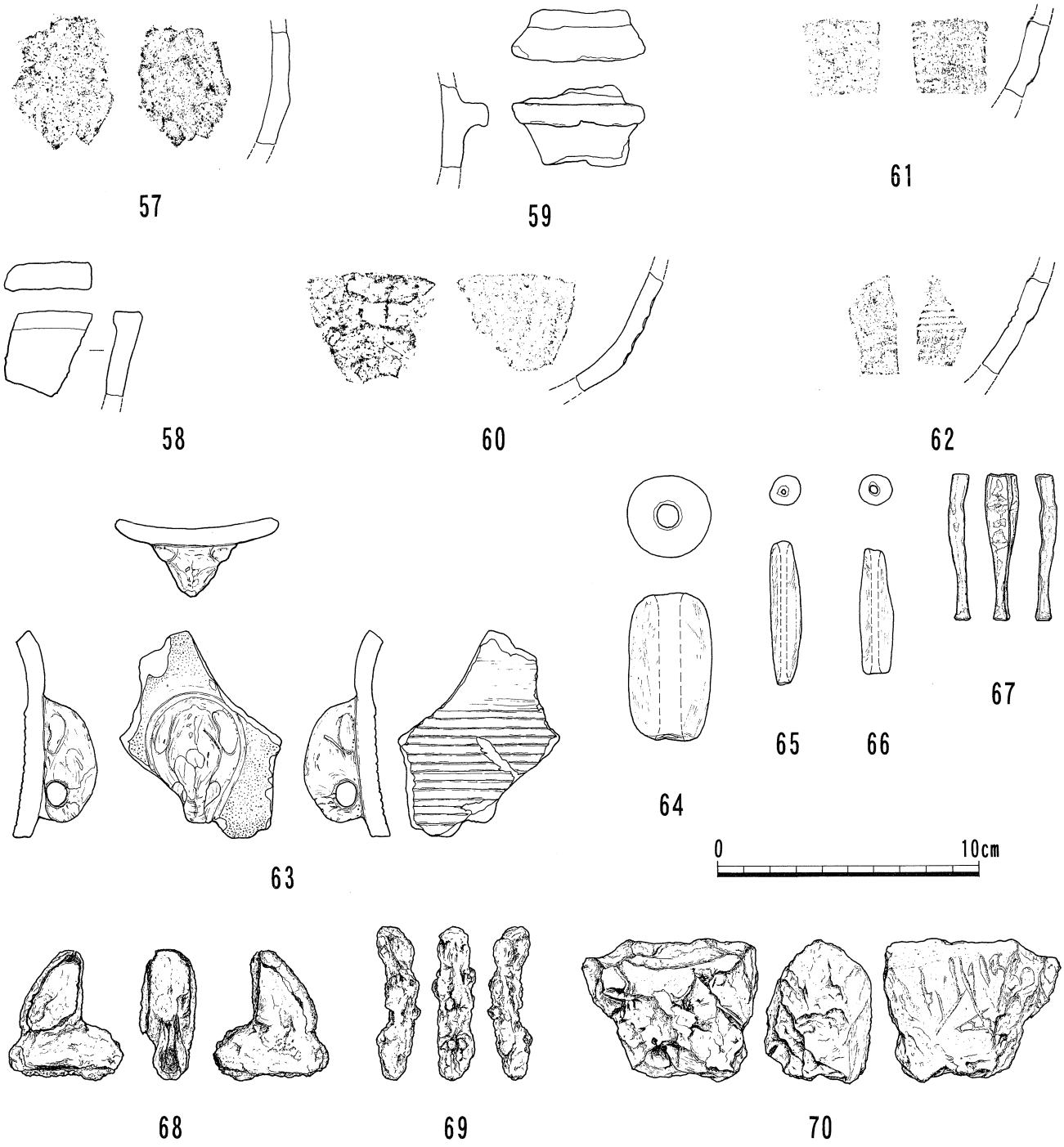
48・50は美濃焼である。前者は，A－5調査区のSK50から出土した皿の口縁部片で，口径およそ12㎝を測るもの。また後者は，A－3調査区から出土した碗の高台部片である。いずれも黄緑色の灰釉を施されて，全体に氷裂文の入るもので，釉面はザラザラしている前者に対して，後者はツルリとしてより光沢の度合は高く，また見込み内には厚く釉の溜まるものである。一方，前者は，引きのばしたS字状に胎部は立ち上がって，端辺部で短く外反するもの。これらはいずれも16世紀の中ごろのものと想定される。49は，前述の41と同類のもので，A－2調査区から出土した小皿片である。形状，大きさ等酷似しているが，器肉のやや薄い点が異なる。これも江戸期の始めごろのものだろう。

51は，A－4調査区のSB01から出土した日本製の染付碗片である。高台径6.0㎝，口径およそ11.0㎝，器高6.7㎝を測るもので，残存部は4分の1程を占めている。胎部は，腰にふくらみをもって立ち上がり，口縁部辺で細まってまっすぐにのびるもの。その胎土は灰白色で緻密であり，また釉は青白色を呈して薄く施されている。染付は内外面の端部および腰部辺に1・2条の界線を巡らすとともに，外面の界線間には草花文を施しており，呉須は淡藍～藍色を呈している。これは17世紀ごろのものと思われる。また52はA－3調査区のSK35から出土した陶片である。器肉は薄く堅緻で，器肌外面はザラザラとして荒く，内面はナデの調整痕を遺すもの。おそらく16世紀ごろのものだろう。53・54はそれぞれA－4調査区，A－2・A－4ベルトから出土した碗の下半部片である。いずれも高台辺は露胎で土見せを形成して，胎土は前者が灰褐色，後者が灰色を呈するもの。後者は失透性の黄灰色釉で，唐人焼の釉に類似するもの。いずれも江戸前期ごろのものと思われる。55はA－2・A－4ベルトから出土した皿で，その口径はおよそ15㎝を測って器肉は薄く，胎部は口縁部辺で外方にやや屈曲している。また作りは精緻なもので，ロクロ調整痕をよく遺し，胎土は茶褐色で緻密。釉は底部内外を除いて薄く施され，釉調は内面が灰緑色，外面が透明色を呈している。17世紀ごろの江戸期のもので，おそらく瀬戸焼と思われるもの。そして56はA－3調査区から出土した陶片で，その胎土は灰色で緻密なもの。白濁釉をかけられて光沢は強く，江戸前期のものと思われるものである。

土師質・瓦質・土錘（第21図・図版8－4）　57はA－1調査区のP28から出土した土師質の小皿である。内外面の体部はナデ調整を施していて，やや粗いつくりである。その胎土は砂粒を含んで灰褐色を呈し，外面の褐色に対して内面はやや煤けて黒色を呈する。中世期のもの。58はA－3調査区のP60から出土した瓦質の鍋もしくは足鍋の口縁部片と思われるもの。胎土は明灰褐色それに対して器肌は煤けてザラザラ感を呈して，内外ともナデ調整を施されている。胎部は直線的に立ち上がり，また端部は平坦気味で，わずかに内側に突出している。これは岩崎仁志氏『防長地域の足鍋について』

のなかでV－B型式の17に近似することから，中世期の周防系の可能性をうかがえるものである。また59も瓦質のもので，A－4調査区から出土している。これは「コ」の字状に突き出た鍔を伴うことから，羽釜系の口縁部片と考えられるもので，胎土は灰褐色，そして内外面とも煤の付着によるのか，黒色系を呈している。これも周防系で，中世期でもおそらく古い部類に入るものであろう。

60は土師質の足鍋もしくは鍋の下半部片と思われるもの。全体に灰茶～灰褐色を呈して，外面に格子目叩き痕がみられる。器肉は0.5㎝を測ってやや薄口であり，内外面ともナデ調整やを施されている。これもおそらく周防系のもので，中世期でも古い部類に入るものと思われる。また61・62は瓦質



第21図　土師質・瓦質・鉄器類実測図

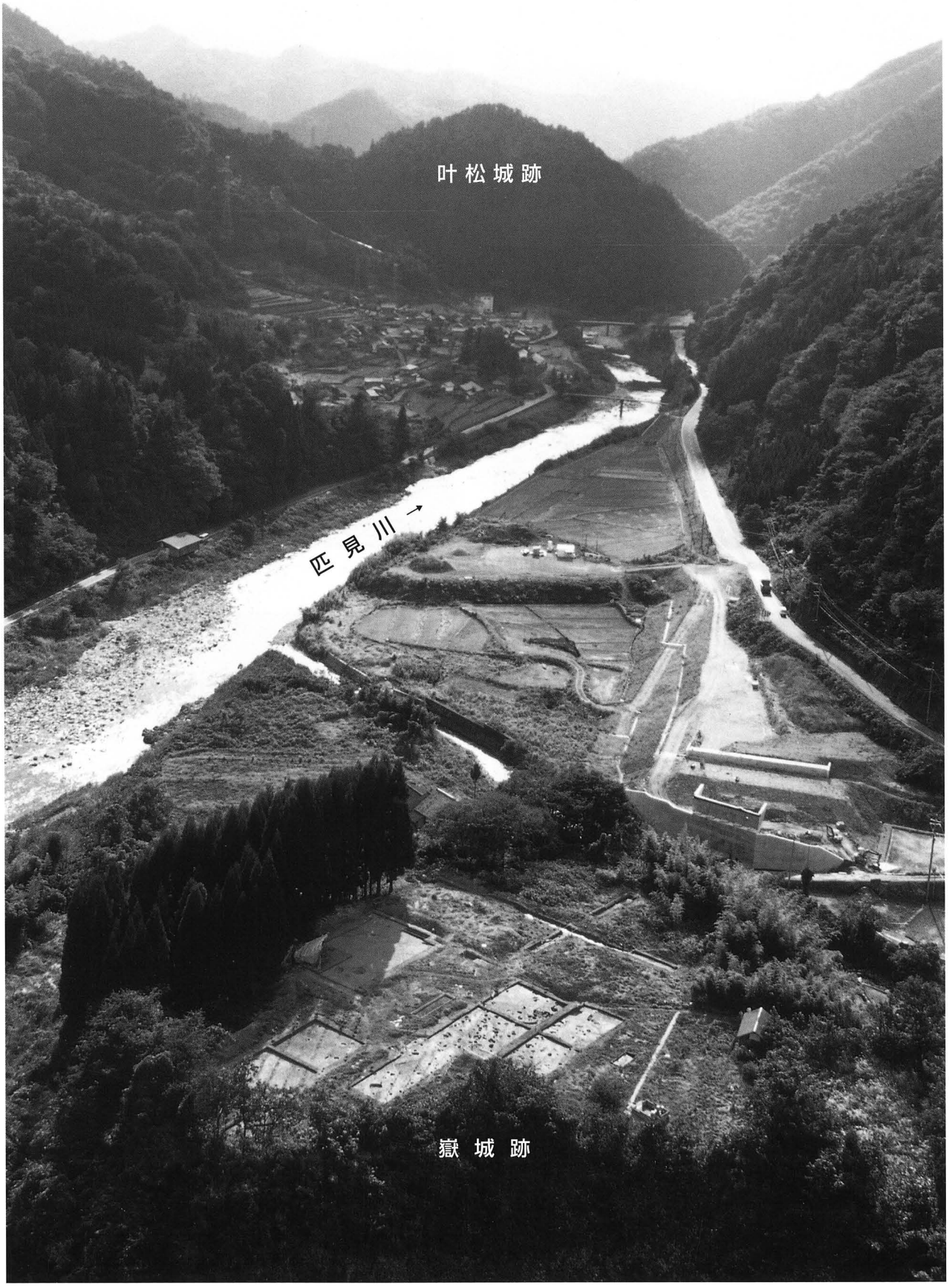
のもので，それぞれB－３調査区とA－５調査区から出土している。いずれも胎土は灰白～黄灰色を呈して密であり，ナデによる調整や仕上げを施されている。後者は内面に４条単位の御目を伴うことから，擂鉢系と想定できるものである。いずれも中世期のものであって，なかでも前者は周防系の可能性をうかがえるものである。63はB－３調査区から出土した火鉢類の飾り部分と思われるもの。これは象の頭部を模しており，鼻を輪状にすることで環穴部を形成しているもの。頭部周辺は細粒的な型押しを施されて，ザラザラ感を呈している。胎土は灰褐色で密であり，色調は内外面とも煤けて黒味を帯びるもの。近世期のものと思われる。

64～66は土錘で，いずれもA調査区からの出土である。このうち64はA－４調査区のSK28から出土したもので，長さおよそ5.5㎝，最大径およそ3.0㎝を測り，浮子状を呈している。胎土は淡橙色であり，全体にナデ調整を施している。穴状部は直線的で径およそ0.7～0.9㎝を測り，近世期のものと思われる。65・66は長めの棗状を呈したもので，いずれも64に比べて細身となっている。全体にナデ調整を施され，さらに65はヘラ調整も加わって，部分的に煤を付着させている。

金属器類・その他の出土物（第21図・図版8－4）　67はB－２調査区から出土した煙管の吸口部である。これは銅製で部分的に青く錆びており，在存器長およそ5.5㎝を測るものである。また器内に竹の繊維を遺すことから竹製煙管の可能性を伴うことができる。68・69は鉄製品で，いずれも腐食の激しいものである。前者はA－３調査区の出土で，屈曲した柄状を呈して，その用途は定かではない。また後者はA－４調査区のSK22からの出土で，おそらく角釘類と思われるもの。質量はそれぞれおよそ76gと13gを測っている。

70は，C調査区の集石半截部から出土した焼土塊である。胎土は灰褐色で堅緻なもので，腹面とする部位には煤などが付着して黒っぽく，またナデなどで平坦味を呈している。このことから野鍛などからの流入物と想像している。71・72（図版8－4）は鉄滓であって，前者はA－４調査区のSK26，また後者はA－３調査区のSK44から出土したものである。質量はそれぞれおよそ218gと105gを測り，また色調はいずれも錆を伴って黒褐色を呈している。73（図版8－4）は，A－１調査区から出土した黒瓦片である。胎土は青灰色の密なもので，器面はにぶい光沢を伴っている。この瓦類は本調査において赤瓦と黒瓦との２種類が検出され，その比率は黒瓦が大部分を占めている。これらの大半は本調査区の北域に位置していた旧小学校等の残片として捉えられるものである。

（山本　浩之）

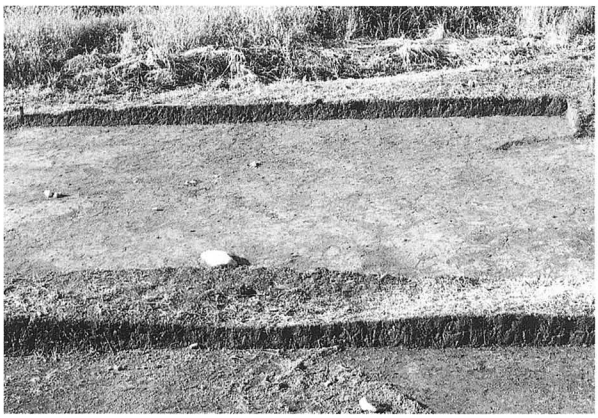


調査地点鳥瞰

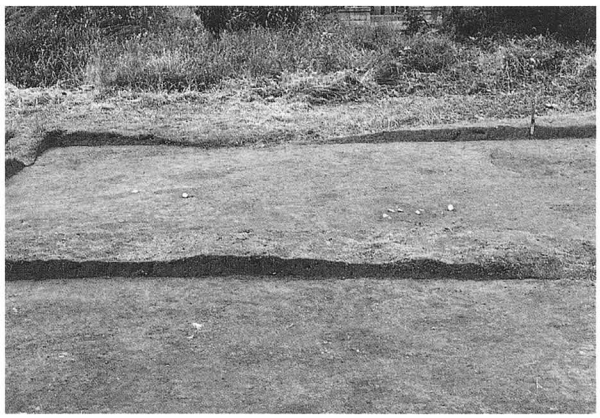
図版 2

1. 北からみた遺跡の近景

2. 上空から望む遺跡の地形的景観

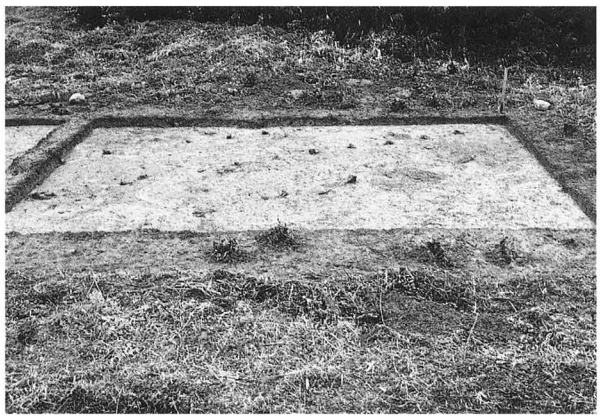


3. A－2・A－4 調査区の北壁（南から）

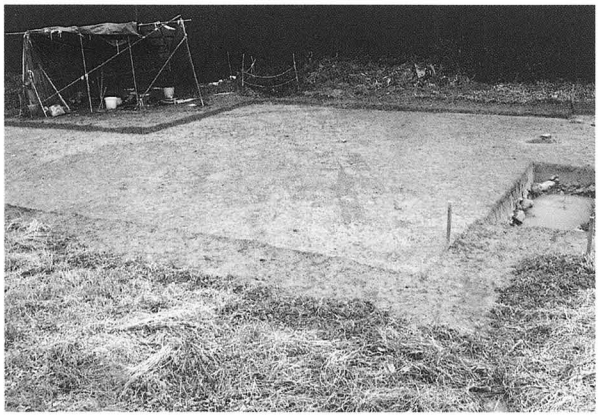


4. A－1・A－3 調査区の北壁（南から）

5. A－5 調査区の北壁（南から）

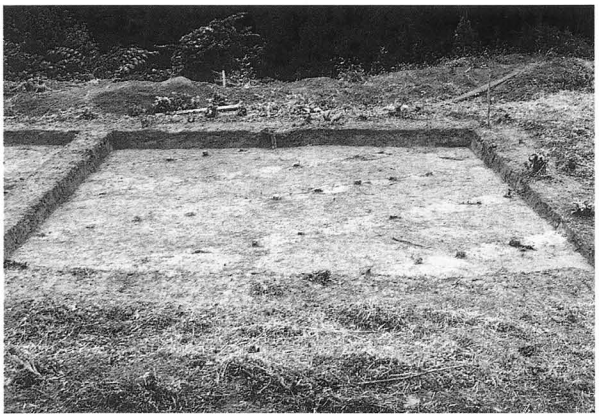


6. A－6 調査区の北壁（南から）

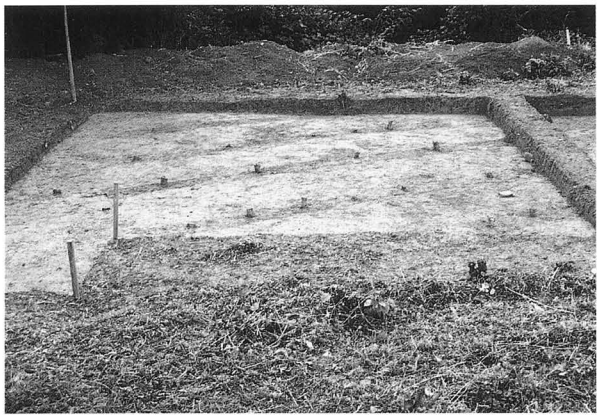


7. B－1 調査区の南壁（北西から）

8. B－2 調査区の南壁（北東から）



1．B－３調査区の南壁（北から）



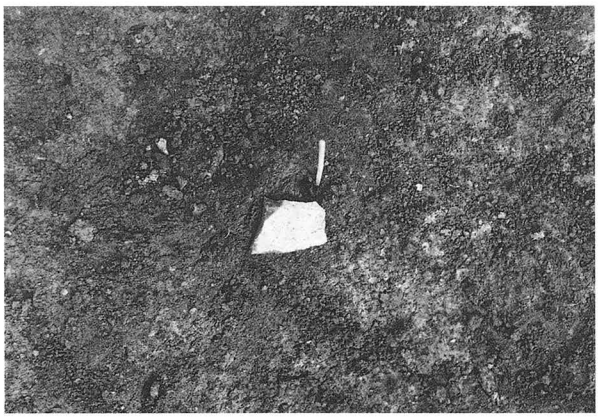
2．B－４調査区の南壁（北から）

3．D調査区の東壁（北西から）

4．D調査区南端の積石状況

5．焼土塊の出土状況（P55）

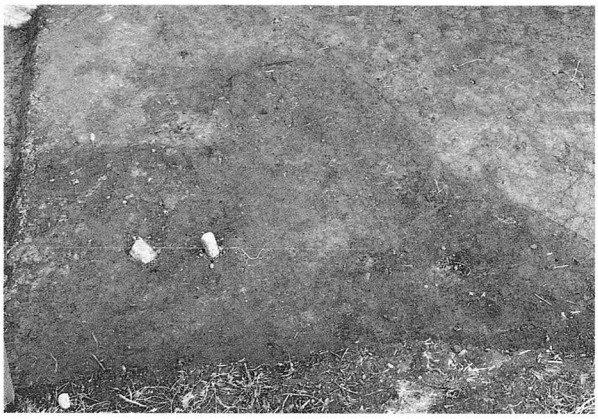
6．土錘の出土状況（SK28）



7．陶磁器の出土状況（SK26－２）

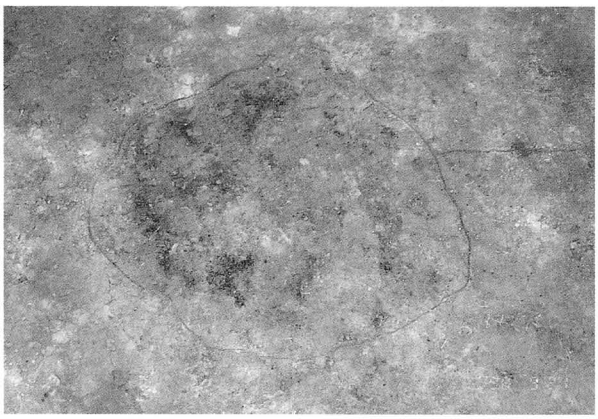
8．SK17の遺構表出状況（南から）

図版 4



1．SB01北半部の遺構表出状況（南から）

2．SK01・SK02の遺構表出状況（南から）

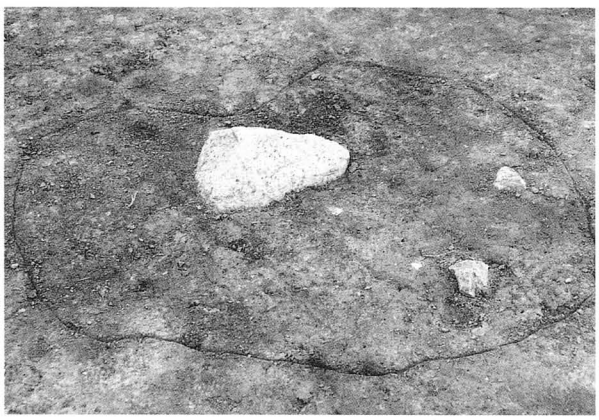


3．SK38の遺構表出状況（南から）

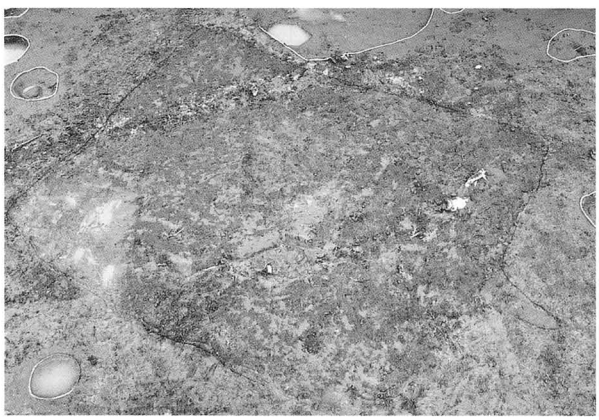
4．SK43の遺構表出状況（北から）

5．SB01南半部の遺構表出状況（南から）

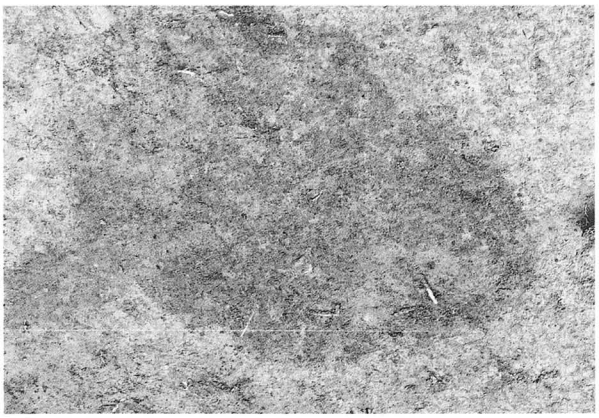
6．SK26の遺構表出状況（南から）



7．P42の遺構表出状況（東から）



8．SI01の遺構表出状況（南から）

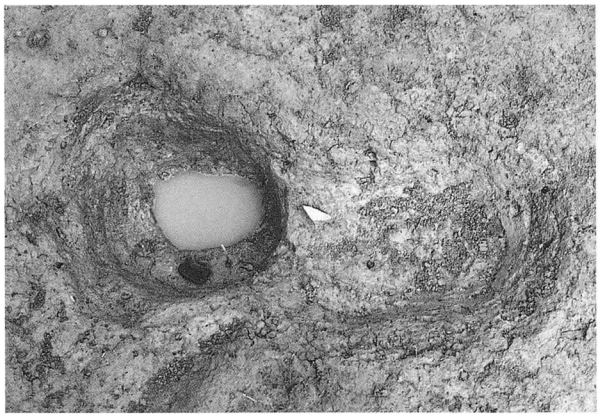


1．SK56の遺構表出状況（南から）

2．P121・P122・P123の遺構表出状況（北から）

3．SK64の遺構表出状況（南から）

4．SK74の遺構表出状況（南西から）



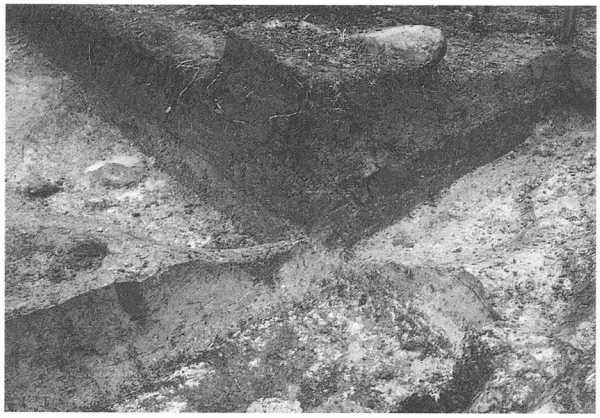
5．SK20の遺構検出状況（南から）

6．SB01北半部の遺構検出状況（南から）

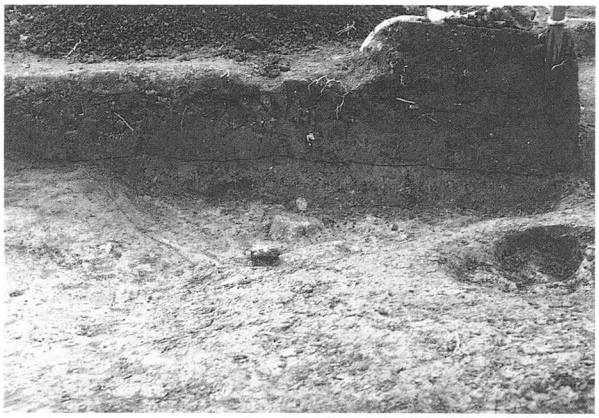
7．SB01－P01の半載状況（南から）

8．SB01の遺構検出状況（東から）

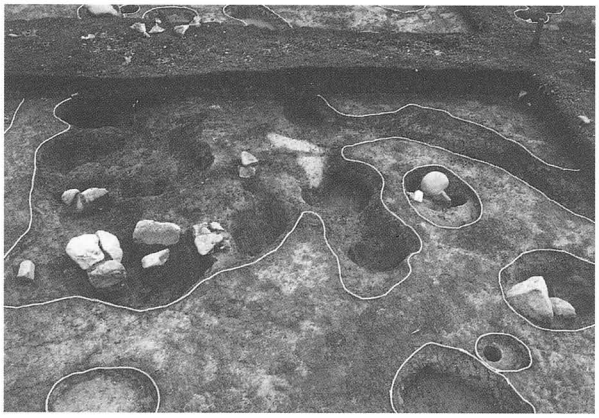
図版 6



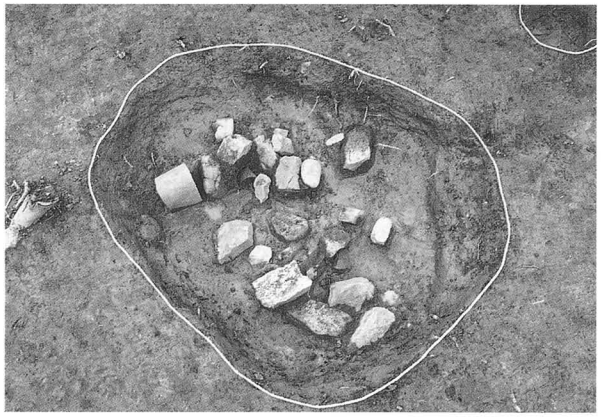
1．SB01の遺構検出部分拡大（北東から）



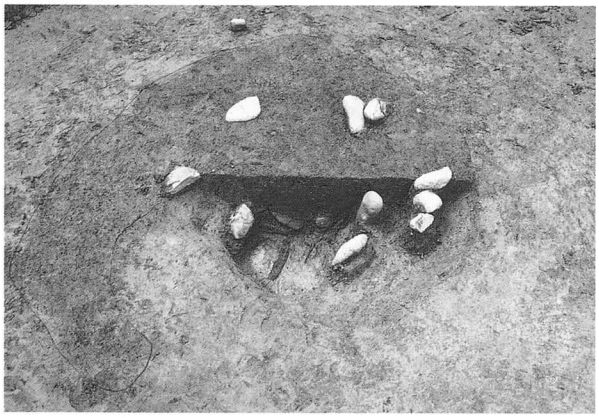
2．SB01の西壁状況（東から）



3．SK26の完掘状況（南から）

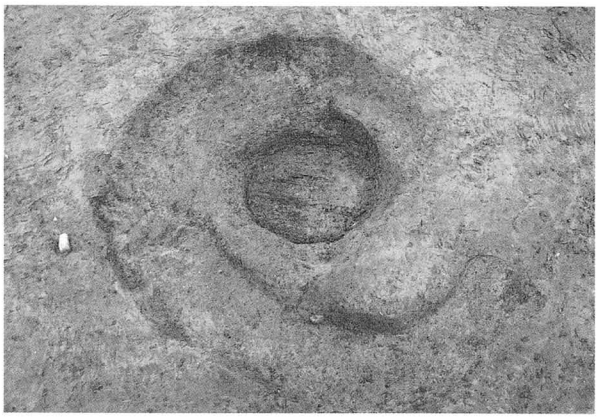


4．SK56の完掘状況（南から）

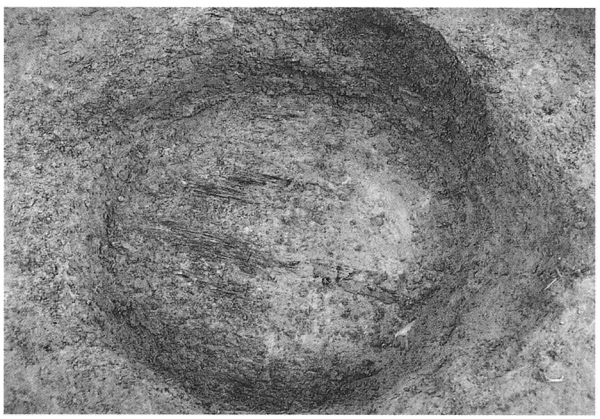


5．SK64の半載状況（南から）

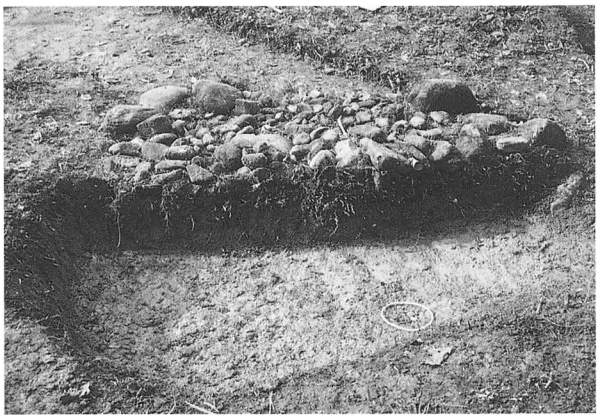
6．SK64の半載部分拡大（南から）



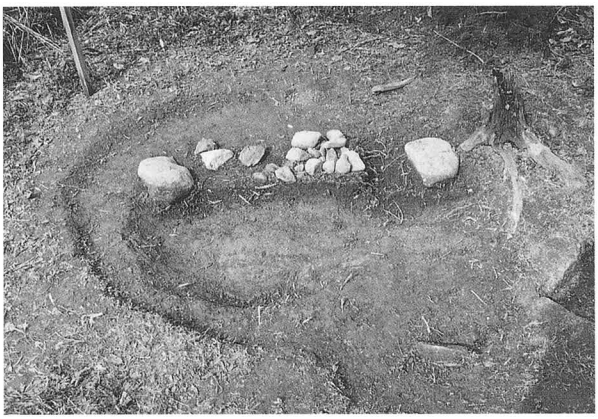
7．SK64の完掘状況（南から）



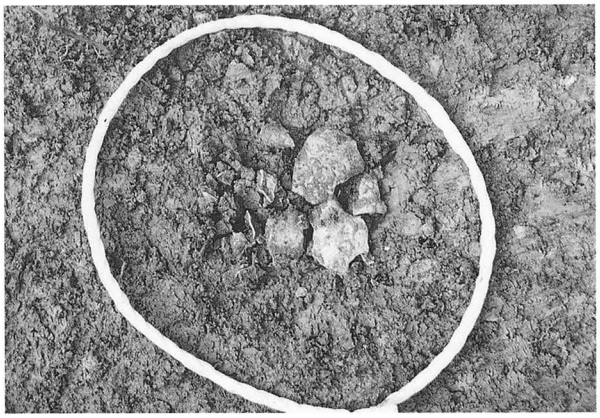
8．SK64の底部拡大（南から）



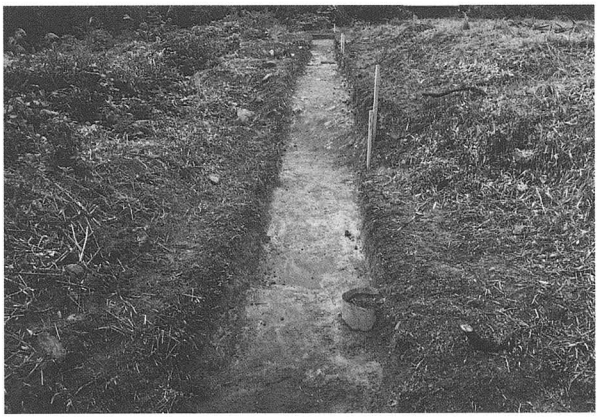
1．SK74の半載状況（南東から）



2．SK75の半載状況（南から）



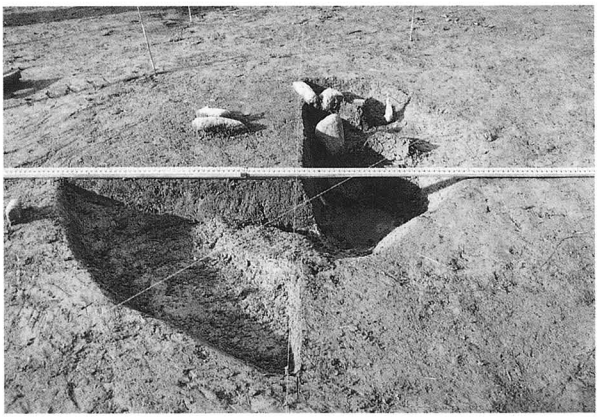
3．SK74の底部から検出された骨片



4．D調査区の完掘状況（南から）

5．B－１調査区の南側の傾斜地にみられる積石

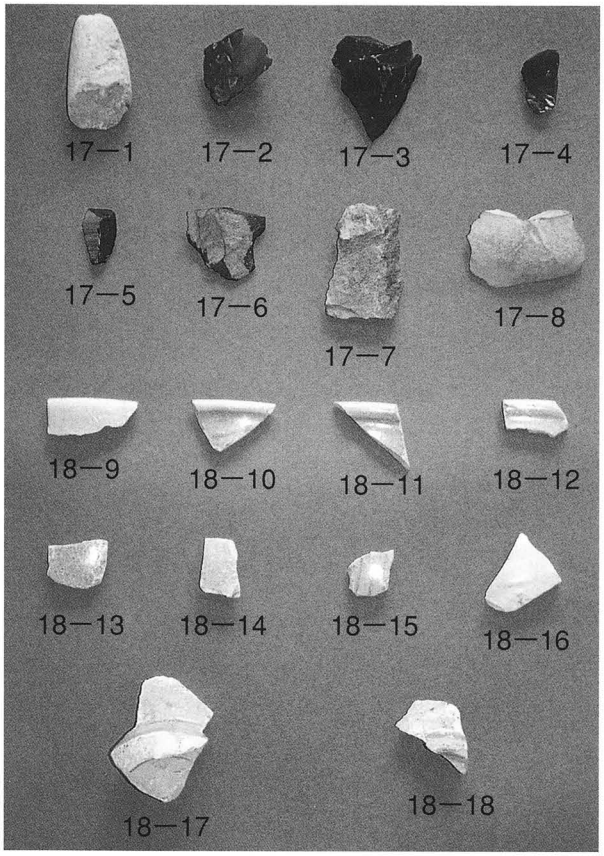
6．遺構半載の作業風景



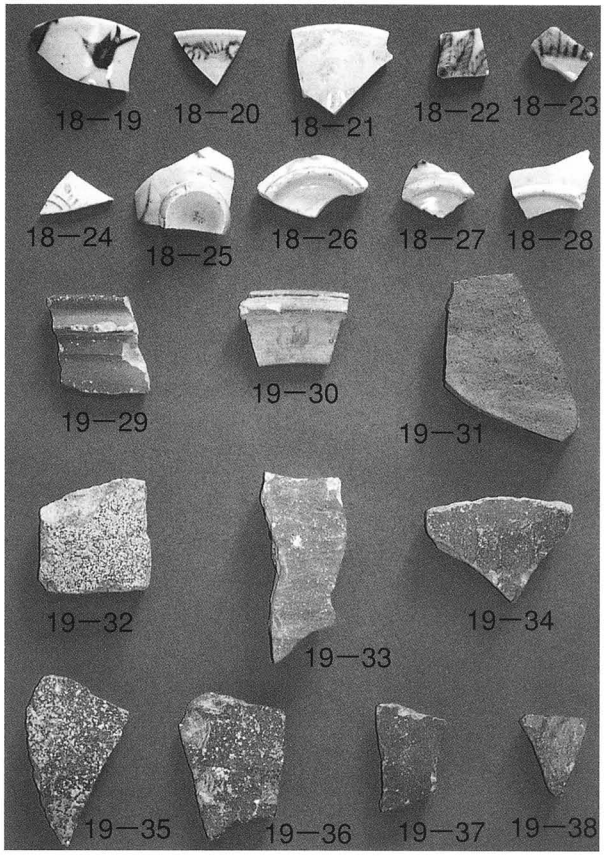
7．SK64の実測風景

8．本調査地点の航空写真撮影風景

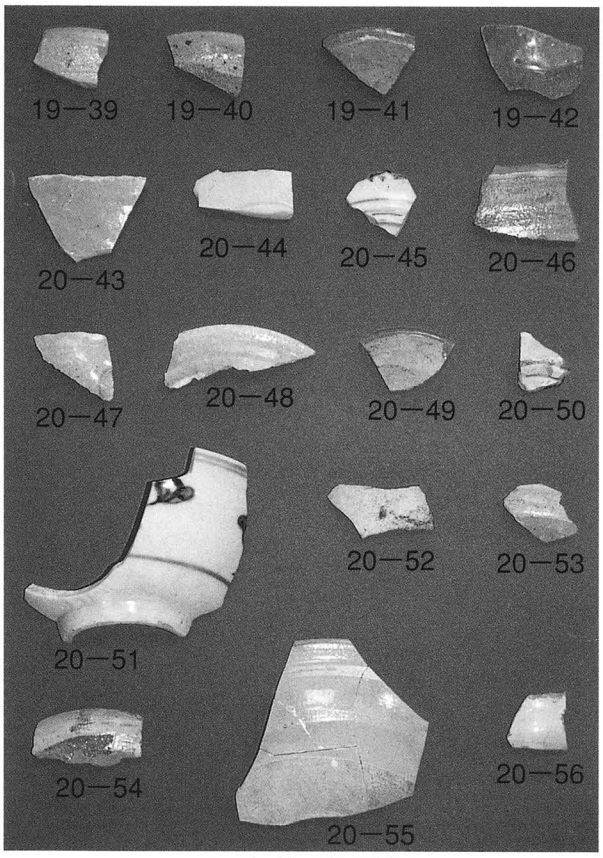
図版 8



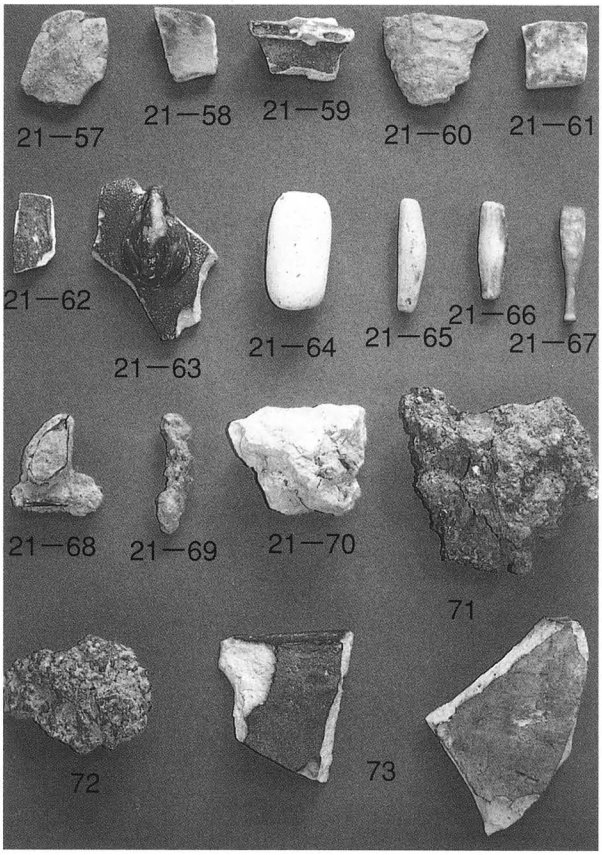
1．石器・剥片・陶磁器類（1）



2．陶磁器類（2）



3．陶磁器類（3）



4．土師質・瓦質・鉄器類

平成12年３月10日　印刷
平成12年３月16日　発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第29集

嶽城跡発掘調査報告書

発　行　　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見イ1260

印　刷　　株式会社　谷口印刷
島根県松江市東長江町902－59